

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

— 北巨摩郡双葉町地内 1 —

1978.3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

序 文

中央道建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査が始まってからすでに10年以上もたち、このことによって本県の考古学調査の質も向上し、規模の大きなものも年々増加しております。これによって甲斐国古代史の学習研究等の向上だけではなく、開発関係者や県民一般の埋蔵文化財保護意識の高揚にも役立っていると思います。

県下の遺跡総数は2000ヶ所以上が確認され、昭和38年当時の1098ヶ所から比べると倍増しております。これは年々新しく遺跡が発見されているためで、専門家による精査を行えば5000ヶ所にも達すると言われております。今後開発が活発化すればする程遺跡が発見され、破壊も進行するという関係にある様です。

遺跡は先人が無意識のうちに残した貴重な記念碑であり、永く後世に伝える必要があります。昭和51年度の発掘調査は通称赤坂台古墳群のうちの二ツ塚1号墳と双葉2号墳を主体に調査したもので、7世紀頃築造のものであることが分りました。甲府盆地北西部の後期古墳としては始めての発掘調査であり、遺構、遺物の学術上の価値は高く、この報告が今後の地域研究学習に資すること大なるを願っております。

調査に参加された皆様をはじめ、種々のご協力をいただいた双葉町教育委員会、地元土地所有者、道路公团甲府工事各務所の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月1日

山梨県教育委員会

教育長 丸 茂 高 男

凡　　例

1. 本報告書は昭和51年度に日本道路公団東京第二建設局から委託されて山梨県教育委員会が実施した北巨摩郡双葉町所在の二ツ塚1号墳、双葉古墳2号、宇津谷無名墳の報告である。
2. 本報告書作成の経費は昭和52年度契約による。
3. 発掘調査の担当及び本書の編集は県文化財主事末木 健が行なった。
4. 遺物整理、製図、トレースは、末木、伊藤、米田、佐野が行った。
5. 図版作成は、末木、伊藤、米田、原稿執筆はそれぞれ文末に文責を記してある。
6. 遺物、図面は県文化課に保存してある。

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| 第1章 序 説..... | 1 |
| 第1節 調査事務..... | 1 |
| 1. 発掘調査事務経過..... | 1 |
| 2. 調査団組織..... | 1 |
| 3. 調査日誌 | 2 |
| 4. ニッ塚古墳及び双葉2号墳測量成果表..... | 3 |
| 第2節 周辺の概況..... | 5 |
| 1. 地理的環境と歴史的背景..... | 5 |
| 第2章 遺跡の概要..... | 7 |
| 第1節 ニッ塚1号墳 | 7 |
| 1. 墳丘、石室構造..... | 7 |
| 2. ニッ塚1号墳出土遺物..... | 21 |
| 第2節 双葉2号墳 | 41 |
| 1. 墳丘、石室構造..... | 41 |
| 2. 双葉2号墳出土遺物..... | 48 |
| 第3節 宇津谷無名墳 | 57 |
| 第3章 考 察..... | 59 |
| 第1節 石室構造について..... | 59 |
| 1. a 石室の形状..... | 59 |
| b 閉 塞..... | 60 |
| c 前庭部..... | 60 |
| d 嵌込み石..... | 61 |
| 2. ま と め..... | 62 |
| 第2節 出土遺物..... | 66 |
| 終 章..... | 70 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|-----------------|-------------|--------|------------------|------------|--------|
| 第1図 遺跡位置図 | 4 | 第21図 | " 和鏡 | 35 | |
| 第2図 甲斐古地図 | 6 | 第22図 | 二ツ塚1号墳土師器及び土師質土器 | 33-35 | |
| 第3図 二ツ塚1号墳地形現況図 | 8 | 第23図 | " 土師質土器(2) | 36 | |
| 第4図 二ツ塚1号墳全体図 | 9 | 第24図 | " 打製石斧 | 37 | |
| 第5図 二ツ塚1号墳石室平面図 | 11, 12 | 第25図 | " 石鐵 | 37 | |
| 第6図 | 石室展開図 | 13 | 第26図 | " 古錢 | 37 |
| 第7図 | 石室断面図他 | 14 | 第27図 | 双葉2号墳全体平面図 | 41 |
| 第8図 | 墳丘断面図 | 15, 16 | 第28図 | 双葉2号墳現況平面図 | 42 |
| 第9図 | 墳丘中段東側列石実測図 | 17 | 第29図 | 墳丘断面図 | 43, 44 |
| | | | 第30図 | 石室平面図 | 45 |
| 第10図 | 北西側溝実測図 | 19, 20 | 第31図 | " 石室展開図 | 46 |
| 第11図 | 墳丘南側溝実測図 | 18 | 第32図 | 石室南北断面図 | 47 |
| 第12図 | 遺物出土位置図 | 21 | 第33図 | 遺物出土位置図 | 49 |
| 第13図 | 土師器、須恵器(1) | 22 | 第34図 | 出土直刀 | 50 |
| 第14図 | 須恵器(2) | 24 | 第35図 | 出土武具 | 51 |
| 第15図 | 須恵器(3) | 26 | 第36図 | 轡 | 52 |
| 第16図 | 鉄鎌及び直刀 | 28 | 第37図 | 装身具 | 53 |
| 第17図 | 轡 | 29 | 第38図 | 須恵器 | 55 |
| 第18図 | 飾金具及び馬具 | 30 | 第39図 | 打製石斧 | 56 |
| 第19図 | 鐸、金環、砥石 | 31 | 第40図 | 石器、古錢 | 56 |
| 第20図 | ガラス玉 | 32 | 第41図 | 宇津谷無名墳 | 58 |

表 目 次

| | |
|--------------------------|--------|
| 表1. 測量成果表..... | 3 |
| 表2. ガラス小玉計測表(ニッ塚古墳)..... | 33 |
| 表3. ニッ塚1号墳遺物出土一覧表..... | 39, 40 |
| 表4. 双葉古墳2号玉類計測表..... | 54 |

図 版 目 次

| | |
|-----------------------------------|--|
| 図版1 赤坂台地航空写真 | |
| 図版2 赤坂台地 | |
| 図版3 ニッ塚1号墳 | |
| (1)紙入式 (2)石室内作業風景 (3)実測風景 | |
| 図版4 (1)発掘調査前墳丘全景 (2)発掘調査終了墳丘全景 | |
| 図版5 (1)石室(正面南側より) (2)石室(北側より) | |
| 図版6 (1)西側壁石積(北側から) (2)東側壁石積(北側より) | |
| 図版7 (1)奥壁 (2)閉塞石内側 | |
| 図版8 (1)石室全景 (2)閉塞石前面及び前底部敷石 | |
| 図版9 (1)西側セクション (2)北側セクション | |
| 図版10 (1)西側側壁裏込石断面 (2)石室前面石列 | |
| 図版11 遺物出土状態(1)和銛 (2)金具 (3)有孔砥石 | |
| 図版12 " (1)鉄鏃 (2)鉄鏃 (3)鐸 | |
| 図版13 " (1)鐸 (2)飾金具 (3)金環 | |
| 図版14 " (1)金環 (2)土師器杯 (3)飾金具 | |
| 図版15 出土遺物 須恵器、土師器 | |
| 図版16 " 須恵器、砥石 | |
| 図版17 " 須恵器蓋破片 | |
| 図版18 " 鉄鏃 | |

- 図版19 " 直刀及び鏃
- 図版20 " 馬具、人骨齒
- 図版21 " 装身具 (1)金環 (2)ガラス小玉
- 図版22 " (1)和鏡 (2)古錢
- 図版23 " 陶磁器
- 図版24 " " 内耳土器
- 図版25 双葉古墳2号 (1)作業風景 (2)発掘風景 (3)実測風景
- 図版26 (1)双葉古墳2号調査前墳丘 (2)石室全景(正面より)
- 図版27 (1)東側壁込石 (2)西側壁込石
- 図版28 (1)東側壁石積状態 (2)西側壁石積状態
- 図版29 (1)閉塞石正面 (2)閉塞石内側石積
- 図版30 (1)西側壁裏込断面 (2)東側壁裏込断面
- 図版31 (1)奥壁根込石 (2)石室北側より
- 図版32 遺物出土状態 (1)切子玉 (2)刀子 (3)鉄鍔
- 図版33 " (1)直刀 (2)鏃 (3)轡
- 図版34 出土遺物 (1)鉄鍔 (2)直刀 (3)轡
- 図版35 " 装身具、玉、金環
- 図版36 " (1)須恵器 (2)縄文式土器
- 図版37 宇津谷無名墳 (1)調査前 (2)作業風景
- 図版38 "

第1章 序 説

第1節 調 査 事 務

1. 発掘調査事務経過

昭和51年度赤坂台古墳群の調査については、路線決定時より協議の対象となっており、保護対象として注意されたこともあったが、この地は竜王町と双葉町との境にあり、行政上の要請、住民の要求等があり最終的には路線がこの地を通過することとなった。従ってこの発掘調査は50年度より数回の協議の積み重ねによるが、51年度の事務経過は下記の通りである。

- 昭和51年 6月28日 発掘調査の概算見積、工程表を道路公団に送る。
7月15日 公団より文化庁長官あて事業計画書が県に提出される。
県より文化庁あて発掘届を提出する。
8月5日 昭和51年度埋蔵文化財発掘調査委託契約が県教育委員会あてに送付される。
8月10日 契約を締結し、一部を公団に返送する。
古墳群の測量調査を8月20まで行なう。
9月20日 道路公団に発掘調査経費の請求書を提出する。
9月25日 双葉町宇津谷無名墳の発掘調査を開始する。
10月1日 双葉町二ツ塚1号墳、宇津谷無名墳の発掘を終了する。
10月13日 ニツ塚1号墳の遺物発見通知を提出する。
昭和52年 3月1日 双葉古墳2号発掘調査を開始する。宇津谷無名墳の二次調査開始。
3月28日 同上終了
発掘調査経費精算書を公団あてに送付する。

2. 調査団組織

二ツ塚古墳1号

- 調査団長 井山佐重（山梨県遺跡調査団長）
調査担当者 末木 健（山梨県教育庁文化課文化財主事）
調査員 菊島美夫（日本考古学協会々員）
伊藤恒彦（日本大学文理学部卒）

補助調査員

佐野勝広（国士館大学）長沢宏昌、保坂康夫（広島大学）米田明訓（明治大学）品川裕昭（駒沢大学）猪股喜彦（立正大学）伊藤智樹、山本茂樹、堀切徹也（日本大学）

作業員

加賀爪幸一、柳本晴彦、小沢きみ、守屋由美子、安達原毅、大木 映、保坂康夫、長田

徹、上田和彦、中村 卓、山田 浩、横森 畏、保坂一之、小田切年男、依田康広、大木寛仁、佐野三枝

双葉古墳二号字津谷無名墳

調査団長 井出佐重（山梨県遺跡調査団長）

調査担当者 末木 鮎（山梨県教育庁文化課文化財主事）

調査員 菊島美夫（日本考古学協会々員）

伊藤恒彦（日本大学文理学部卒）

調査補助員

佐野勝広（国士館大学）米田明訓（明治大学）藤田 豊、小林清隆、石井忠行（駒沢大学）

作業員

飯室美津江、保坂のり子、飯室俊子、守屋由美子、中村昌子、長坂江里、中沢 喬

事務局

文化課長 山寺 勉 文化課長補佐 横小路正雄 文化財担当副主幹 波木井市郎

3. 調査日誌

a ニッ塚1号墳発掘日誌抄

8月10日地鎮祭。11日除草、12日地区設定のためのボーリング調査、除草。13日墳丘を6区画に分け、4.5.6区の表土剥ぎを行なう。14日石室側壁、奥壁一部が見られる。15日西側壁一部、6区墳丘極部に溝があった。16日3区の表土剥ぎ。17日、3区で石室側壁確認。18日石室内より近世陶器、土師質土器が多量に発見される。19日2.3.4区の表土剥ぎ。1区にトレチを設定し、地山まで達する。21日3.4区の調査。3区で墳丘中段がテラス状になり礫が積まれている。22日2.3.4.6区の調査。3.4.6区のトレチ掘り下げ。23日石室内、前庭部等の掘り下げ。相変わらず焼土と陶磁器、古錢等が多量に出土し、馬の骨等が出土する。24日、2.3.4.5区を調査。前庭部遺構の範囲が確認された。25日、3.4区セクションの実測。26、27日、雨天のため作業中止。28、29日。5区ベルト除去。30～9月1日、石室内の清掃。前庭部清掃。遺物が若干出土する。2、3日、石室内清掃。トレチ土層実測。5、6日、石室内、裏込石の清掃。7、8日石室内の溝及び石群を清掃する。9日10日雨天。11日石室全体を清掃し貴板をセットする。12日、墳丘北側から西側の溝を確認。13日、前日と同作業。14日、石室平面実測開始、溝の追跡。15日実測及び溝の調査。16日溝の調査。石室実測。17、18日、溝の清掃の結果、周溝ではない。石室内実測。19日石室内及び外部の実測。20日石室正面図作成。内部終了。21日石室内エレベーション及び全体図。22日23日雨天休日。24日4区実測。他区清掃。25日3.4区実測。26日3区平面図、南溝の実測。27日前日と同じ。28日雨天整理作業。29日北側溝実測。裏込石断面図。30日石室内清掃写真。床敷石の除去。4区裏込石の断面図。10月1日、側壁堀込み確認作業。墳丘測量。2日閉塞石の実測。3日前庭部実測。4日前庭部調査。5日作業終了。

b. 双葉古墳 2号調査日誌抄

昭和52年3月1日作業開始。除草、石室のプラン確認。2日ベルト設定し、盛土を6区画に分ける。石室内埋土除去。3日、作業休み。4日、北側のマウンド掘り下げ。石室掘り下げ。5日、盛土、石室内埋土除去。6日、休み。7日、北西セクション実測。盛土排土。8日、北東セクション岡及び石室、盛土の堀り下げ。9日、セクション及び掘り下げ。10日北側トレンチ発掘、セクション岡、盛土排土。11日、前日と同作業。12日セクション北側をほぼ完了。13日ベルト北側除去。14日、盛土、ベルト除去。15日周囲に杭を折ち1m×1mのグリッドを設定する。16日、石室内清掃、石室実測開始。17日休日。18日、16日と同作業。19日、石室実測、石室内清掃。20日石室内実測、21日5区セクション実測。22日1区セクション実測。石室内清掃。23日休日。24日、石室内敷石除去。閉塞石を取りはずす。25日作業終了。

c. 宇津谷無名墳調査日誌抄

9月25日地形測量作業、桑の抜根を行う。26日、地形測量。27日、地形測量。トレンチ設定。28日、前日と同じ。29日地形測量終了。30日、南北トレンチ発掘。10月1日、前日と同じ。

52年3月25日。南北トレンチ発掘。26日セクション実測。27日東西トレンチ発掘。28日東西トレンチ発掘及び実測。作業終了。

4. ニッ塚1号墳(No.5) 双葉古墳2号(No.3) 測量成果

この測量はコクサイ航空測量株式会社に委託して得たものである。

| 点名 | X | Y | H | 備考 |
|--------------------|-------------|-------------|---------|----|
| 双葉2号墳 No.3 | -35 691.972 | + 706.521 | 350.670 | |
| No.3 A | -35 691.972 | + 696.596 | 349.119 | |
| No.3 B | -35 691.972 | + 716.795 | 348.932 | |
| S T A No.310+0(右) | -35 691.852 | + 703.527 | 350.612 | 巾杭 |
| S T A No.310+20(右) | -35 706.975 | + 717.072 | — | 巾杭 |
| 二ツ塚1号 No.5 | -36 061.883 | + 1 326.453 | 337.515 | |
| No.5 A | -36 050.151 | + 1 316.516 | 336.238 | |
| No.5 B | -36 071.603 | + 1 334.686 | 334.821 | |
| S T A No.317+20(左) | -36 055.185 | + 1 326.589 | — | 巾杭 |
| S T A No.317+40(左) | -36 066.068 | + 1 343.291 | — | |

第1表



第1図 遺跡位置図 (1.二ツ塚1号墳 2.双葉2号墳 3.宇津谷無名墳)

第2節 周辺の概要

地理的環境と歴史的背景

甲府盆地西側にあって南へ長くのびるゆるやかな斜面がある。近年宅地化され、新興住宅が複数をとりまく様に並び、開発が進んでいる地域である。この地域は赤坂台地とも登美台地とも呼ばれている。山梨百科辞典を引用すれば次の様になる。

赤坂台地『山梨県竜王町北部から双葉町竜地に至る標高350m以下の幼年期の台地で、東方及び南方にゆるやかに傾斜して甲府盆地に接している。竜王新町から旧信州往還がこの台地上に上るところを赤坂というので、赤坂台地と呼称する。古記に見える「猿原の丘」もここをさしている。八ヶ岳火山の泥流から成る台地で、双葉町の塩崎地区から続く台地の先端である。北方茅ヶ岳火山のすそのとの境を敷島町大狗沢以北の賀川が刻んでいる。西方は釜無川に臨む高岩の露岩が絶壁をなし、近年この上を竜王バイパスが通じ、眼下のちょう望がよい。(手塚豪)』

登美台地『双葉町から竜王町に及ぶゆるやかに傾斜した台地状地形を呼称する。茅ヶ岳火山の南方山ろくに当る標高300~500mの火山す野の部分で、地形上、甲府盆地と塩崎市との間の障壁をなす。地質時代の新第三紀末期から第四紀の初期に及ぶ火山活動の噴出物から成る。(弘田文範)』

この様にして見ると台地北側を登美台地、南側を赤坂台地と一般的には分けている様で、今回調査の古墳群は赤坂台地に含まれるものであろう。台地上からは甲府盆地が眼下に広がり、盆地をとりまく高い山々が障壁のようにそそり立つ様子が盆地をひきしめている。この台地のボーリングデーターを手にしていないが、墳丘下約1mの築造に関する土層は次のとおりである。

表土：約15cm、耕作を受け、粘性の強い赤褐色を呈する。乾燥すればかたくバサバサし、水を得ればドロドロになる。

第2層：約20~30cm、粘性の強い褐色土である。

第3層：灰青色を呈した粘土で、しまりがある。層厚は不明。

この様に赤坂台地は粘性の強い土で覆われ、地表には磯を見ることが少ない。冬には八ヶ岳から吹きおろす寒風が台地上の砂を巻き上げて黄砂の様な景観を見せるため居住には適していない。現在はほとんどが桑畠と雑木林であり、水の少ない台地としてはこうした農耕が良策のものであったろう。雑木林も多くクヌギ、ナラ等の落葉広葉樹林帯を形成している。

標高は二ツ塚1号墳のあたりで337m、双葉2号墳で349mを計る。台地の下の水田面が288mであるからその比高は約50~60mである。この台地上には古墳が幾つか存在するが、双葉町海坂上の神の湯温泉脇に2基、希望ヶ丘団地の上の今回調査した二ツ塚古墳周辺には5基存在する。この5基はいずれも中央道建設の為に発掘調査を実施することになっている。竜王町2号墳3号墳及びふたん塚と、双葉町二ツ塚2号墳は昭和52年度に発掘調査を実施し、53年度報

告する予定である。赤坂台南西斜面には孤塚古墳群があり、古墳と思われるものを含めて4基の古墳が存在する。それぞれが破壊を受けて完存するものは無い。又、台地南の水田面と接するあたり慈照寺の裏に1基。更に竜王駅西側に1基存在したらしいが現存しない。台地西斜面に両目古墳群として戦前まで3基の古墳が残っていたが、開墾により全く消滅してしまった。これらの古墳について近世調査された報文が甲斐国志に記載されているのでぬき書きしておきたい。

甲斐国志 卷之四十六

古蹟部第九 巨摩群北山筋

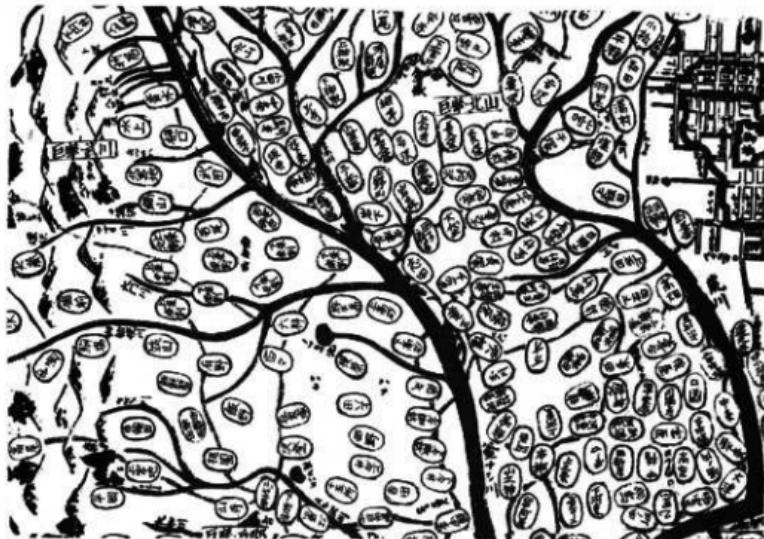
「何人ノ荒墳ナルヤ知ルベカラズ御旗塚御座石（方式間高六尺）ニッ塚隠レ石（方六尺許）
皆龍地ノ耕田中ニアリ鉄具矢根ノ土中ニ獲ルト云」

宇津ノ谷古戦場

「枝村滝沢組ノ西南ニ孤山東ハ神田界ヨリ南原ノ中ヲ信玄ノ戦場ト云ヘ本陣ノ跡ハ勝山ト云
古墳四所西ノ上ト云所ニ在リ高岱文余圓周ハ九間ツツ中間相距ルコト各五捨間許也（往時勝山
ノ古墳ヲ開キ大刀二握ヲ得タリトテ藏ムル者アリ皆腐朽テ用途ニ堪ヘズ）」

○回看塚（右同村）穗坂路ノ傍ニアリ

○滝沢ノ東、長者屋敷（同村支村唐松）ニ河原石ヲ聚メ積ミタル處々ニアリ柱礎ノ類ナリシヤ
ラン石室モ五六基存シタルアリ。



第2図 甲斐国古図

○西山郷 龍王ノ古名ナリ

赤坂台アタリニ五輪石塔、古塚等石室五六基存シタリ、龍地ノ域ニモ一二基アリ。

○島上条村（現在飯島町北部）

スベリ
藻石塚ハ周圍拾六間上ニ石を建ツ長サ九尺横五尺厚二尺也金石塚周四拾八間建石ノ長它横七尺厚三尺之敲バ金声ノ余聲アリニ基トモ石室ノ墳レタリト見ユ碑類ニハ非ラジ御正作ト云處ニ石室の存ジタルモアリ周圍拾七間許リ也石室一基（境村）舟塚（志田村）ハ石室ノ墳タル也中納言塚（吉沢村）道輪村（獅平村）

等々上記のような記述が見える。又信玄の時代にはこのあたりを將軍地藏原と言つて「方三里余ニ余爾曠原也」と表現される程一面の枯尾花の波うねる原野であったことが推定されるが古墳築造期の様子を知ることはできない。

（末木）

第2章 遺跡の概要

第1節 ニッ塚1号墳

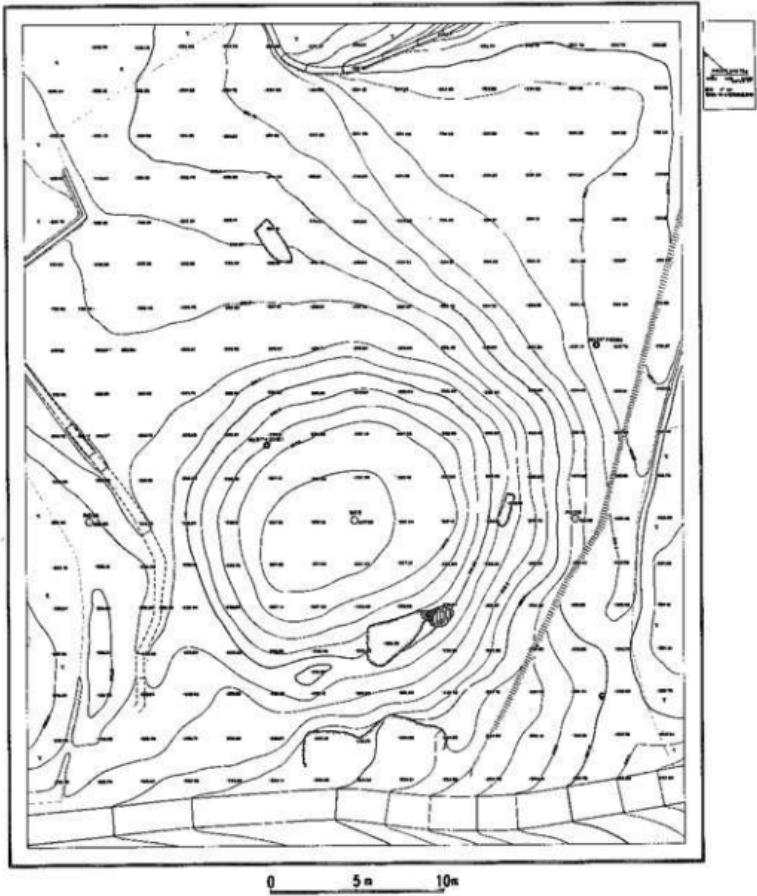
1. 墳丘、石室構造

北巨摩郡双葉町竜地字ニッ塚2383番地、標高 337m に所在するこの古墳は調査前には雑木林に覆われていた。周辺は桑園であり、以前区有地であったために、第二次世界大戦後までこの塚は馬の屁を捨てる場所となっていた。この為、調査中に馬骨が多量に発見され、その埋葬によって墳丘及びその周辺が若干破壊されている。又、石室内の地表下 1m あたりには焼土 10cm 位の層があり、焼土より上には近世、現代の陶磁器等が多量に発見された。奥壁の欠損している部分が煙道で、天井石が存在した時には焼却炉として使用されたものであるかもしれない。同例が長野県岡谷市カロウト石古墳にも見られる。

（墳丘）

現存する墳丘の外径は約 22m、現存する墳丘の高さは基底面中央部よりも約 2m、墳頂部は削平され、本来の高さは減じられている。墳丘は印地表上にその大部分を盛り上げているが、石室根石の奥壁寄りは旧地表黒色土と地山を若干掘り下げて構築している。旧地表上の厚さは 10cm~15cm で漆黒色を呈しており、墳丘中心部に向うにしたがい堅くしめつけられている。これは、墳丘位置を決定した時に、整地し土地を踏み固めたと考えられ、更に墳丘の土圧が加えられたものであろう。

盛土は下部及び石室裏込寄りは水平に茶褐色土と暗褐色土を交方に積むが、墳丘外側にゆくにつれて斜に盛り上げている。古墳の周囲には古墳築造以降の溝がめぐっており、古墳の正確な径を把握することはできないが、中央東西セクションで観察するかぎりでは、石室中軸線より半径 10m 余を計る。



第3図 二ツ塚1号墳現況平面図



第4図 ニツ塚1号墳全体図

原地形は東南斜面で、長い勾配が地山面で認められる。しかし、これらの盛土は恐らく周囲の土を削りとて盛ったもので、特に南側を多く削り古墳の正面から眺めた場合に盛土以上に大きく見える。

墳丘中段前面側には列石がめぐっているが、この断面は墳丘中段をし字形に削ってテラスを作り、このテラスに人頭大の礫を積み上げている。葺石であるとはっきり断定しがたいが、それに類したものであろうと思われる。石は角礫（山石）で、主軸と直交する両側では調査範囲外の為に石の有無は確認できず、墳丘をめぐるものであるかは不明である。しかし現存状態を見ると帯状に連なり、東側は奥壁裏側まで続く様に思われる。

墳丘全体を礫が覆っていたかどうかについては断定できないが、墳頂部が削平されていることや、古墳周辺の溝中に礫が多く落ち込んでおり、石取りがされたこともあって結論はできない。あるいは土留列石の役割をもつものであるとも思われる。

溝が墳丘周開をめぐるが、南東側に1本、北西側に3本あり、南東側の溝は北東から南西方に向走り、確認された壁は急斜面をもって礫も多く転落している。北西側の溝は調査以前から1本の溝が北から南へ走っており、調査が進行するに従って前の溝と平行して新たに2本陥出された。いづれも須恵器片の他に陶磁器小片が出上している。

墳丘北西側中段に長方形の3個の石が列をなし、墳丘に伴うものと断定できる。

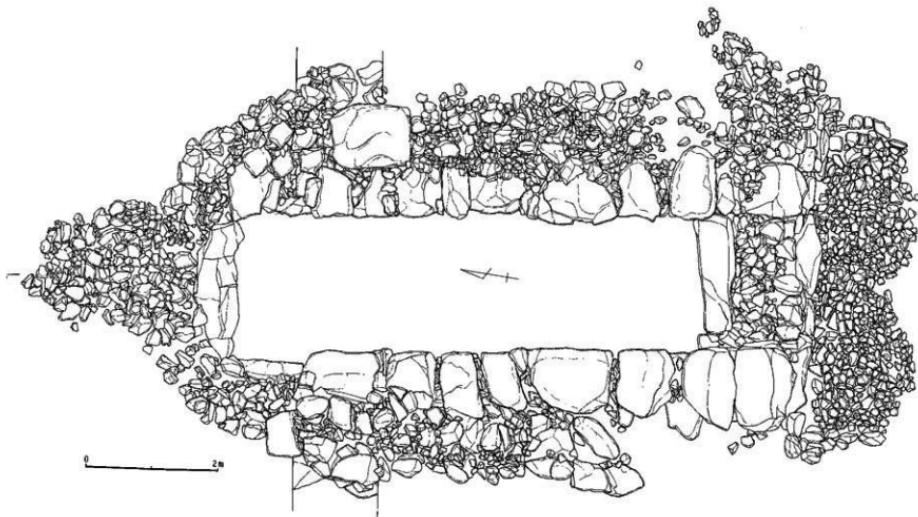
（内部施設）

石室は盛土の中心にあってN-1-Eの主軸方向を示す無袖型横穴式石室で、天井石及び側壁の一部はすでに持ち去られており、天井石、側壁と考えられる石は近辺に散乱していない。地元の老人が語るところによれば、中央線開設時に集石として破碎したということである。しかし天井石と側壁一部のみで中央線の用石とするにはあまりに少なく、むしろ近隣の畠の石垣及び地塊の石として利用されたと考え方が適當ではなかろうか。

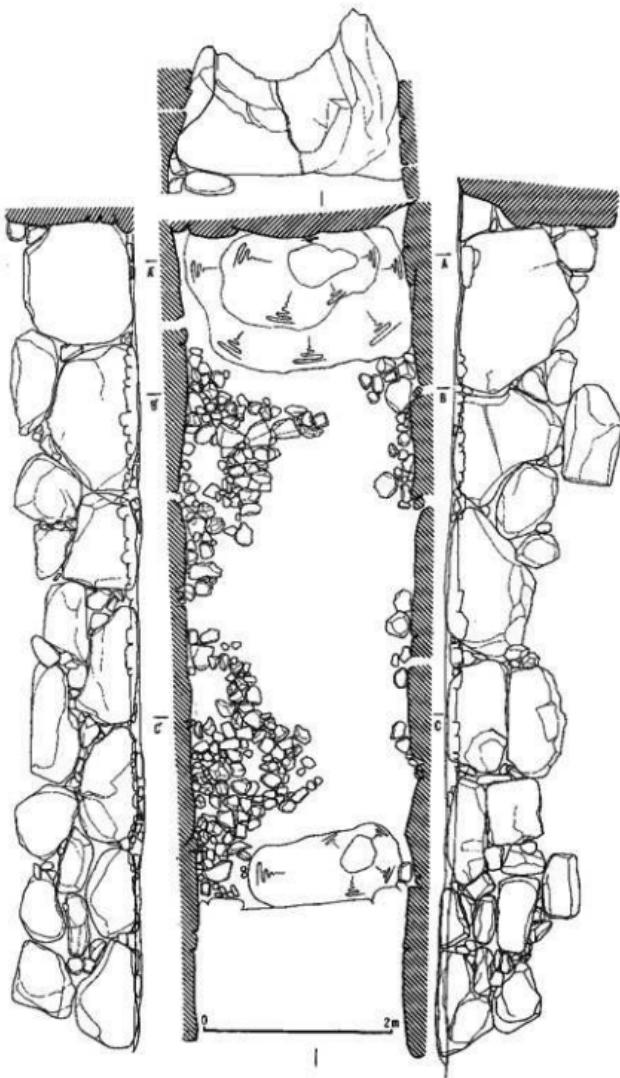
石室の関係係数値を列記すると、石室内奥壁巾248cm、茨門巾220cm、中央巾240cm、東側壁長910cm、玄室長（主軸上）712cm、閉塞石の厚さ150cmである。奥壁は上部2分の1程が採石のためにU字状に破壊されているが、かつては2m位の高さであったと推定される。基底部は平らであるが、上部はおむすび形に丸くなっていたと思われ、石室の巾を充分に満し、ほぼ垂直に建てられる。奥壁の厚さ80cmで天井まで達する一枚石で構築される。現高1.76mを計る。

側壁は自然石割石乱石積と呼べるもので、東側壁は通目積部分が前半分、互目積が奥壁に近い部分を構成する。基底部の石は7個で、奥の3個は広口と横口を内面にし、前4個は、小口を内面にそろえている。二段目以上は小口積で、石の大きさは奥壁寄りが大きく茨門近くはやや小さくなる。巨石の隙間に石を詰めて安定させている。

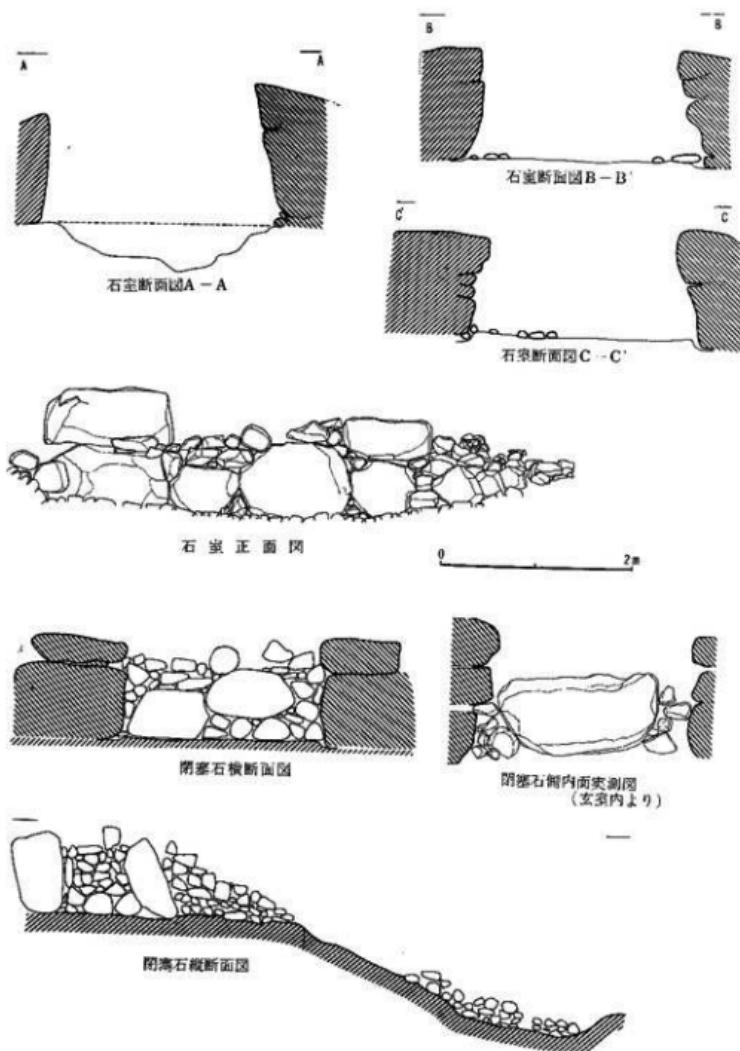
西側壁は根石に7個の石を使用し、奥3個は広口と横口にすえ、前4個は小口を内面に向けている。割石互目積で2~3段が残っている。現在壁高120cmを平均とし、東壁でも同様である。



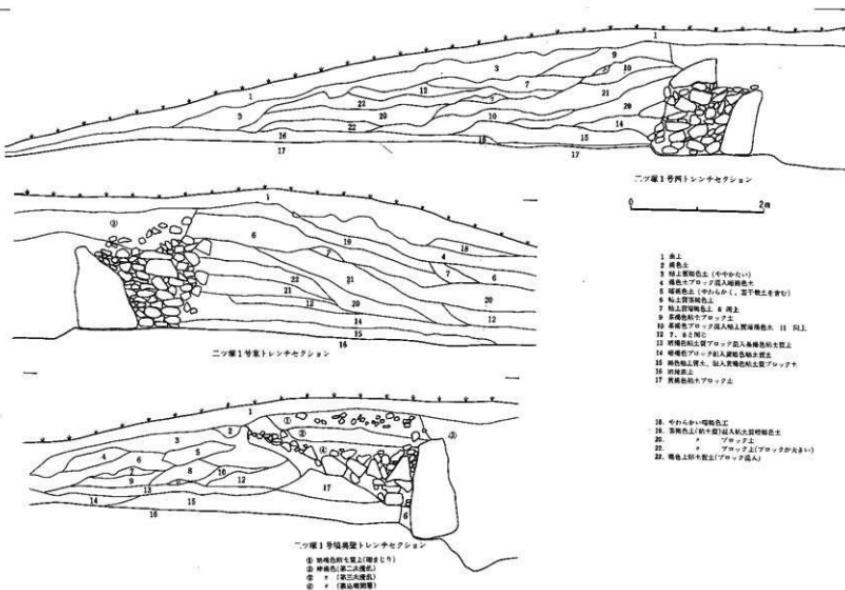
第5図 二ツ塚1号墳石室平面図



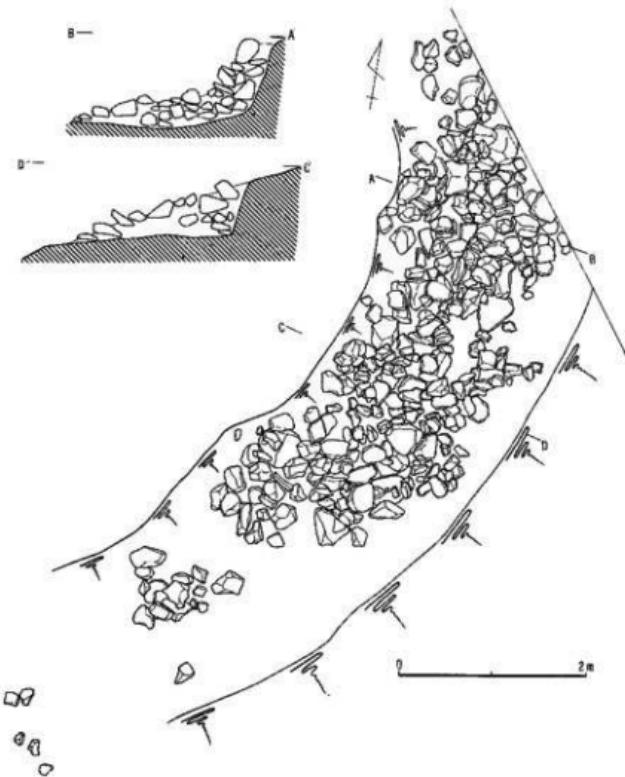
第6図 二ツ塚1号墳石室展開図



第7図 二ツ塚1号墳石室断面図他



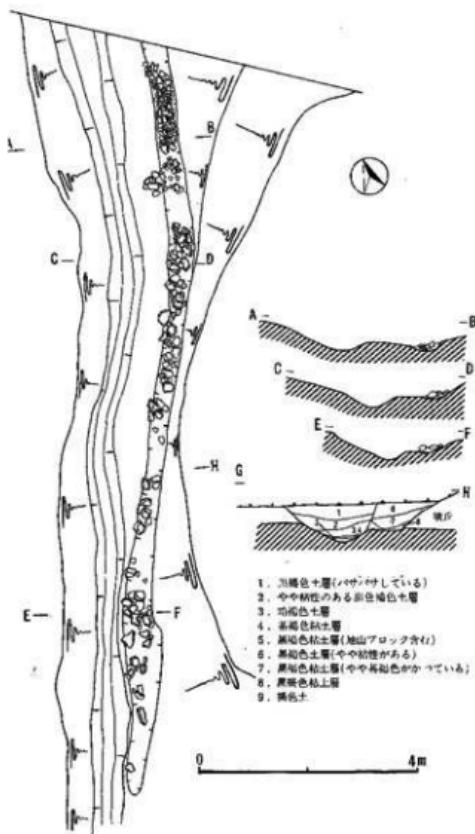
第8図 二ツ塚1号埴堀跡断面図



第9図 ニツ塚1号墳墳丘中段東側列石

石室礫床は側壁根石底面よりやや高く造られており、かつては全面に拳大から人頭大の角礫が敷かれていたと考えられるが、奥壁部閉塞石内面の擾乱及び石室中央部に擾乱が見られ入口部に向ってゆるやかに傾斜し奥壁と入口部では約10cmの高低差が認められる。敷石は閉塞石の下には続いていない。

閉塞石は前述した様に巾220cm、奥行150cmで次門巾一杯に積まれる。現存する高さは約1mであるが、後門正面は側壁後門正面と同一面に石を並べている。その正面基底部には大きな石を2個並べ、東のものは広口に、西側のものは小口を正面に置き、更にその上に3~40cmの人



第10図 北西側溝実測図

頭大角礫を小口積にしている。内面には $120 \times 80\text{cm}$ 、厚さ5~60cmの板状石を広口に掛け、西側壁とのすきまに角礫をはさんでいる。この内外石の間には人頭大角礫を不規則に投げ込み、現存する閉塞石は盗掘によって動かされていないことが調査により判明した。

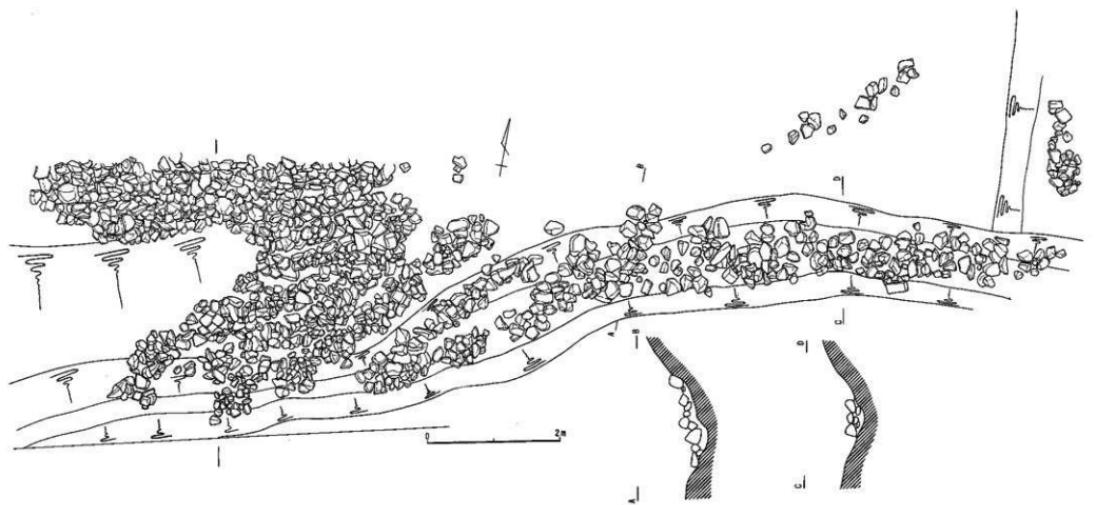
前底部は巾500cm、長さ150cmの広さに角礫が敷かれ、茨門隔壁石の間よりやや広く、かつては長方形に設置されていたと考えられる。盛土と前底部は石積によって区切られており、石積の一部が西側に残っている。

前底部は地山黒色土上に造られ、石室内レベルと一致するが、中央部主軸上がやや深み両側にゆるやかに登っている。

石室の裏込石の厚さは石室内面から計ると、東側235cm、西側220cm、奥壁では330cmであってたっぷりとした容量をもつ。裏込外側石積は長い石を横に並べたり、大きな角礫を置くが、積まれたというより外側へ広がるように造られており、断面圖作成の場合にも上

部裏込がせり出していて落石の危険があった。裏込石は東側に比べやや小さい石が多く、石の間にはほとんど土は含まれていない。又、奥壁裏込みは逆三角形に入れられており、平面プランではこの部分のみU字状に突出している。

(山本茂樹、末木 健)



第11図 墓丘南側溝

2. ニッ塚1号墳出土遺物

本墳の主体部とくに石室は、天井石も撤去され、床面の敷石もその大部分を失っており石室内には二次的に堆積した近世の土層が形成され著しい攪乱をうけている。それ故にその石室内より出土する遺物も、極端に言えば古墳時代より現代に致るまでのものが多数入り乱されている。ここでは一応古墳時代の遺物より時代を下らせて説明を加えていくが、一部に例外的なケースも存在する。例えば古墳そのものが、平安時代人の埋葬の場として、二次的に使用されている例が確認されているからである。¹⁾

以下次の順序で解説していく。

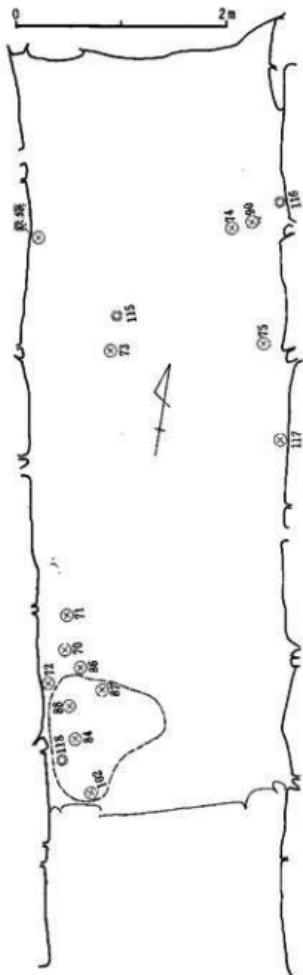
- (1)土師器 (2)須恵器 (3)武器 (4)馬具
- (5)装身具 (6)不明金具類 (7)砥石 (8)銅鏡 (9)土師質土器 (10)古錢 (11)繩文時代の遺物

以上の中(1)～(7)までが古墳時代の遺物として把えられるものであるが、石室内出土の国分期の土師器は、分類の都合上(1)の中で取り扱うこととした。御了承願いたい。

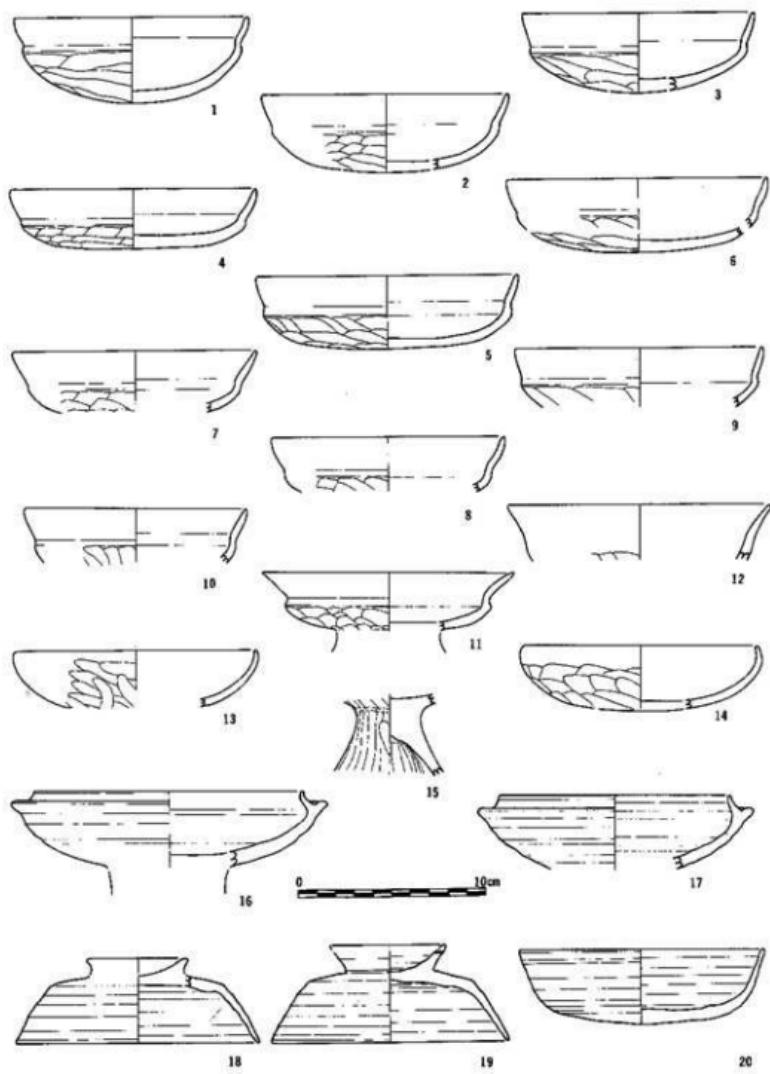
(1)土師器(第13図1～15、第22図1～5)

出土した土師器は、鬼高期末のものが主で他に若干の国分期末のものを含む。出土地点は石室内と前底部に集中しているが、ほとんどが片断であり、完形品は前底部より出土した杯一個体である。

第13図1は前底部より出土した唯一の完形品の杯である。外面はスヌが付着して黒褐色を呈し、内面は褐色で、胎土はきめが細かく焼成も良好。口径は12.5cm、器高は4.6cm。脚部の縁を境にして上は横ナデ、以下は底部方向からのヘラ削りが施されている。内面は横ナデ。底部は丸底で、棱か



第12図 ニッ塚1号墳遺物出土位置図



第13図 土師器(1~5) 須恵器(1)(16~20)

ら上の口唇までの横ナデ部分は、全体の高さから見ると他のものに比べて非常に巾が狭い。第13図の2、3、6～10の杯は器形から見ると1に類するが、後から上の比率がやや大きくなっている。2は口径13.2cm、器高4.2cm(いずれも推定)で、外面はススが付着し黒褐色で横ナデとヘラ削り、内面は赤褐色で横ナデ。胎土は細かく焼成も良好。3は口径12.4cm、器高4.2cm(いずれも推定)で、内外共に赤褐色を呈する。外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土は細かいが焼成はやや軟弱である。6は口径14cm、器高4cm(いずれも推定)で、内外共に赤褐色を呈する。外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土は荒く焼成も軟弱。7は口径13cm(推定)、残存高3.2cmで、内外共赤褐色を呈し、外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土は細かいが焼成は軟弱である。8は口径12.5cm(推定)、残存高2.9cmで、内外共灰褐色を呈し、外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土は細かいが焼成は軟弱である。9は口径13.3cm(推定)残存高3.2cmで、内外ともススが付着して黒褐色を呈する。外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土はきめが細かく焼成も良好である。10は口径12cm(推定)残存高3cmで、外面はススが付着して黒色を呈し横ナデとヘラ削りが為されている。内面は横ナデ、胎土は細かく焼成も良好である。

第13図4と5の杯は、胴部に棱を有し、口縁がやや外反するものの、底部がほとんど平坦になっている点で前記の一群とは若干特徴を異にする。4は口径13.2cm、器高3.2cm、5は口径14cm、器高3.8cm。双方とも内外は赤褐色を呈している。外面は横ナデとヘラ削り、内面は横ナデ。胎土は細かいが、焼成はやや軟弱である。

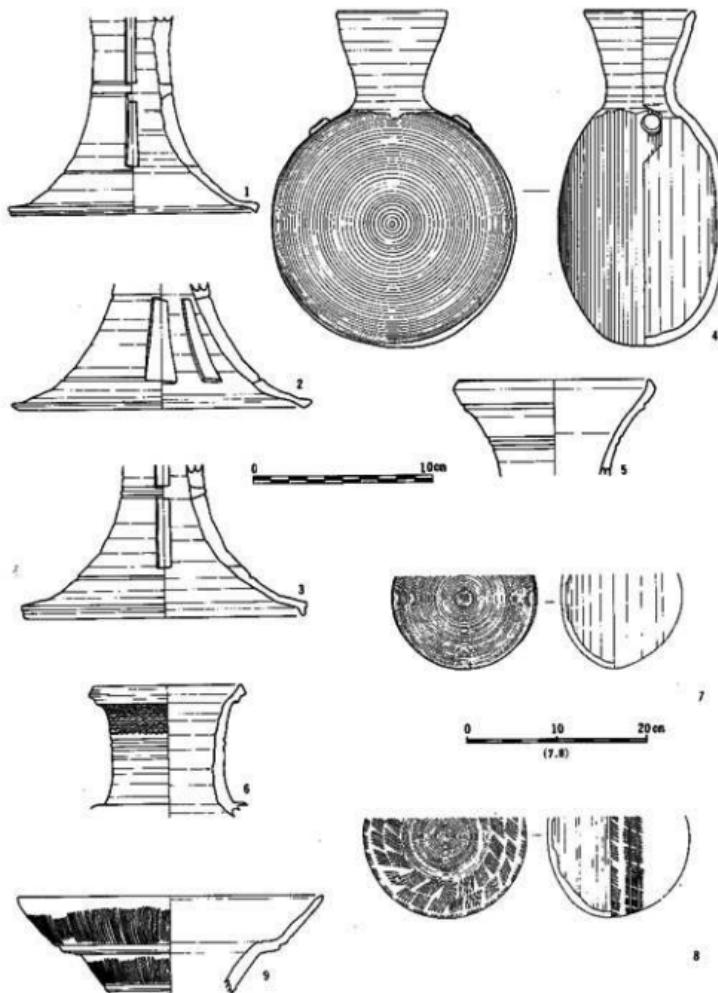
第13図13、14は口縁が内側して胴部には棱をもたない杯である。13は口径13cm(推定)残存高3cm。外面は暗褐色で横ナデとヘラ削り、内面は褐色で横ナデ。胎土はきめが細かく焼成も良好。14は口径12.6cm、器高3.5cm(いずれも推定)であるが、胴部がやや張り出して最大径は胴部にある。外面はススが付着して黒褐色を呈し、横ナデとヘラ削りが為されている。内面は暗褐色で横ナデ。胎土はきめが細かく焼成も良好。

第13図の11と15は高杯である。11は杯の部分で口縁は大きく外反し胴部には棱を有する。口径は13.6cm、残存高は3cm。内外ともススが付着して黒褐色を呈する。外面は横ナデとヘラ削り。内面は横ナデ。胎土は細かく焼成も良好。15は脚の部分である。色調は赤褐色を呈し、胎土は細かく焼成も良好。内外共にヘラ削りが為されている。

以上鬼高峰期に比定できる土師器の他に、国分期のものも若干出土しており、全て杯である。(第22図1～5)。

第22図1は口径12cm(推定)、残存高4cm。口縁は玉縁で外面はロクロ水引きの上からヘラ削りが行なわれている。内面もロクロ水引き。内外共に赤褐色を呈し、胎土は細かく焼成も良好である。2は口径11.4cm(推定)残存高2.8cm。口縁はやはり玉縁で外面はロクロ水引きの上からヘラ削り、内面はロクロ水引き。内外共に赤褐色を呈し、胎土は細かく焼成も良好である。3は口径11.6cm(推定)、残存高2.8cm。玉縁口縁で、内外共ロクロ水引きで赤褐色を呈する。

胎土は細かく焼成も良好である。4と5はやや玉縁を呈し、4は口径11cm（推定）、残存高2.8cm。5は口径12.8cm（推定）残存高2cm。共に赤褐色を呈して、内外ロクロ水引き。胎土はきめが細かく焼成も良好である。



第14図 須恵器 (2)

なお、以上五個体の国分期の杯は全て石室内より出土している。

(2)須恵器（第13図16～20、第14、15図）

○杯：第13図17は口径12.4cm、残存高4cmで灰青色を呈する。たちあがりは矮小化して、全体に浅く扁平である。受部はやや上向きに外方へのび、受部の上面にはヘラによる一条の沈線が施されている。なおこの土器は高杯の可能性もある。20は口径13.2cm、器高4cmで灰白色を呈する。底部はヘラ削りが施されている。口唇はやや丸みを帯びており、蓋の可能性もある。

○蓋：蓋にはつまみがつくもの（18、19）と、つまみをもたぬもの（20）がある。18は口径13.2cm、器高4.6cm（推定）で灰白色を呈する。つまみは欠損しているが、19のような中くぼみのつまみがあったと思われる。肩の部分はヘラ削りが為される。19は口径12.8cm、器高4.6cm（推定）で灰白色を呈する。肩の部分はヘラ削りで、つまみとの境には一条のヘラによる沈線が施されている。

○高杯：第13図16は高杯の杯の部分である。形態は17に近似している。口径14.5cm、残存高4.2cmで灰青色を呈する。たちあがりは矮小化し、全体に浅く扁平。受部は水平に外方へのびている。

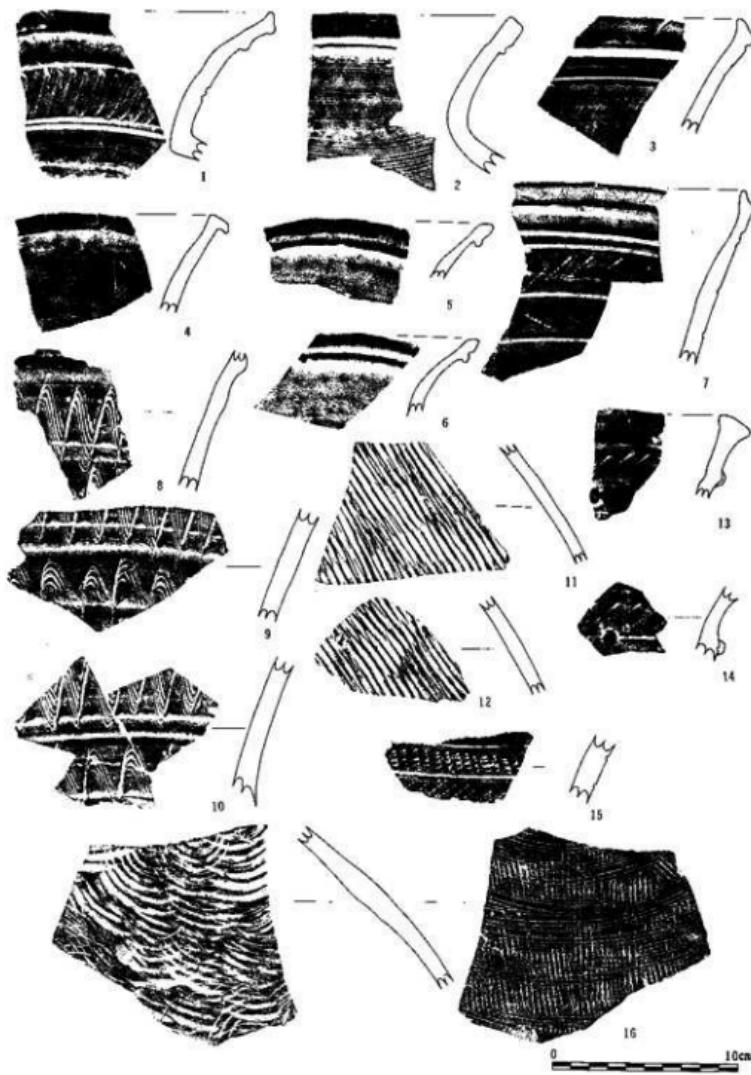
第14図1～3は高杯の脚の部分であり、全て二段透しである。1は底径13.8cm、残存高11cmで灰黒色を呈する。二段二方の長方形透しで、裾部はラッパ状に広がり、端部には浅い凹線がめぐらされている。3は底径18cm、残存高8.4cmで灰黒色を呈し、その他特徴は1に酷似している。1も3も胎土に多量の石英粒を含んでいる。2は底径16.3cm、残存高7cmで灰青色を呈する。二段三方の台形の透しを有し、裾部はラッパ状に広がり、端部はやや丸みをもたせてある。

○提瓶：第14図4は前庭部出土のはば完成品である。口径6.1cm、体部最大幅13.6cm器高18.8cmで灰黒色を呈し、外面全体と内面口頸部には自然釉がみられる。耳はほとんど退化してボタン状の小突起となっている。体部の刷毛目文はラセン状に施されている。口頸部と体部の境には粘土のつぎ目が残っている。

第14図7も提瓶と思われるが復原実測であり、その全体の姿は把握できない。色調は灰青色を呈する。5と6は瓶の口頸部と思われる。5は口縁が大きくラッパ状に開いて、口唇がぐくの字状にやや内側する。三本の浅い沈線が施されている。口径は10.6cm、残存高は4.8cmで灰色を呈する。6は口径8.4cm、残存高7.4cmで灰白色を呈する。中ほどに二条の浅い沈線をめぐらし、その上に8単位の崩描き波状文を施している。

第14図8は、おそらく提瓶の体部かと思われる。体部最大径19cm、残存高12cmで灰青色を呈する。胎土には石英粒を含むが焼成は良好。最も張り出した部分に二条の浅い沈線をめぐらしているが、それは体部下半に三段にわたって施された叩き目の上から施文されている。底部付近には崩毛目文がみられる。

○魁：第14図9は魁の口頸部で、口径17.6cm、残存高5.6cm、外面は灰黒色を呈し自然釉がみ



第15図 須恵器 (3)

られ、内面は灰白色を呈する。胎土には小石を含むが焼成は良好である。口縁部と頸部の境には明瞭な段がつき、内面の段にはヘラによる浅い一条の沈線がめぐらされている。外面の口縁部と頸部には、それぞれ備描文が施されている。

○甕：第15図は甕の破片である。1～10、13～15、が口頭部、11、12、16は体部で、それぞれ一個体の甕の中でも断片的な資料でしかない。1は二条の沈線を施した後に備描き波状文を施している。口縁はややそりをもって外反している。灰青色を呈する。2は灰青色、3～6は灰色を呈する。7は外面は灰青色、内面は灰色を呈し、外面には四本の浅い凹線をめぐらし、その間に二段の備描き刺突文が施されている。8～9は同一個体と思われて灰白色を呈し、備描き波状文が施されている。11と12も同一個体であり、外面は非常に薄い同心円状の叩き目が見られ、内面には右下がりの平行叩き目が施されている。色調は灰白色を呈する。13～15もおそらく同一個体であろう。共に灰青色を呈して胎土は荒く焼成は良好である。16は外面灰白色、内面灰青色で、外面は浅い平行叩き目を付した後に刷毛目文が施されている。内面は同心円状の叩き目が施されている。

以上、二ッ墳一号墳出土の土師器、須恵器の概要を記したが、これらの他に時代は下るが、青磁、土師質土器、陶器などの土器類も出土している。それらについては後述する。

(3) 武器（第16図、第19図1～3）

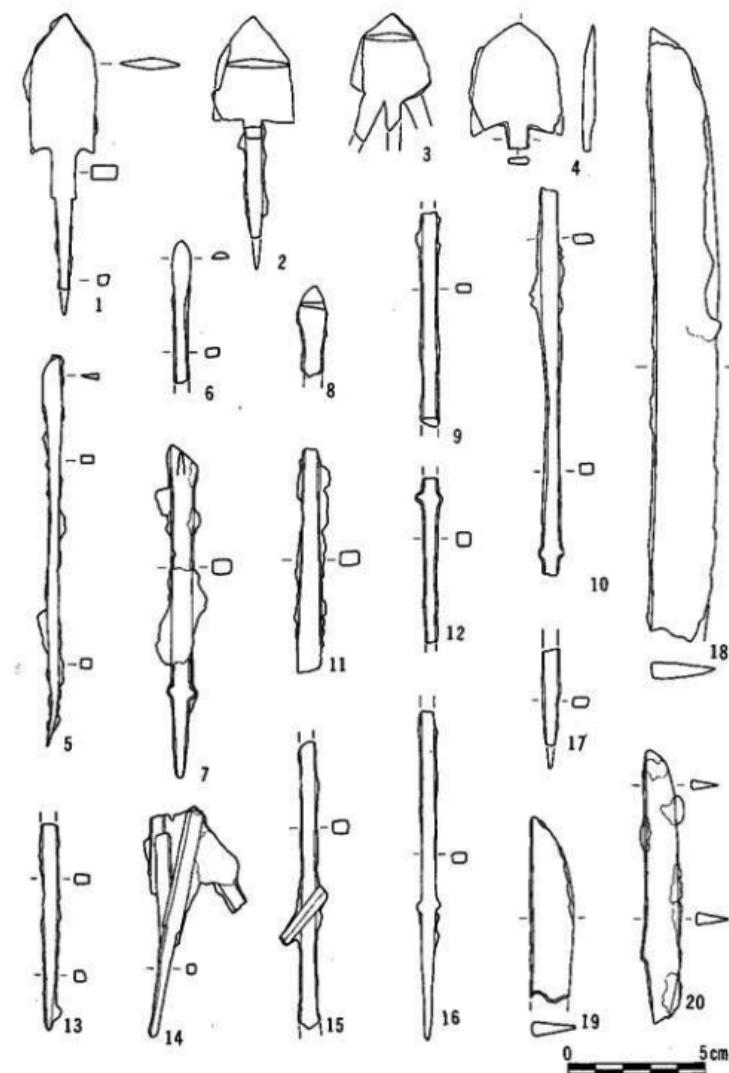
○鉄鎌：平根鎌4本をはじめとして17本の鉄鎌が出土している。それらの中で形式の判別が可能なもののみをあげてみたい。なお形式分類は後藤守一の研究に従った。²⁾

第16図1は石室内出土で長さ11cm(推定)。やや逆刺を有するが、五角形を呈しており、有茎笠被両丸造主頭式として把握できるものであろう。これに対して第15図2は、長さ9.5cm(推定)、の逆刺のない五角形で、棘や笠被も有してはいない。有茎両丸造主頭式に属する。石室内出土。

第16図4も同じく有茎両丸造主頭式であるが、茎の大部分を欠損しており、やや逆刺を有している。石室内出土。3は閉塞石中より出土したものであるが、遺存状態が悪く形式不明。5は全長14.3cmで前底部出土。棘笠被片闊刃箭式に属する。棘の部分は状態が悪く明確に把握されない。6は大半が欠損しているが、石室内出土で片丸造棘笠被盤箭式である。7は全長12.2cmで石室内出土。8は大半を欠損している。7と8は共に棘笠被端片刃箭式に属すと思われる。他のものは鎌身の部分を失っており形式を把握するものは不可能だが、大半のものは棘を有しており、笠被をもつものは第16図14のものと、先に記した第16図1の二つだけである点が注意される。

○小刀：第16図18は石室東壁上より出土した小刀であるが、鋒と刃の部分は欠損している。残存部全長21.7cmで、ややそりをもっているが、平鍔平造である。

○刀子：第16図19、20は石室内のほぼ同一地点より出土した刀子である。19は残存部全長が、



第16図 鉄鎌及び直刀、刀子

6.7cmで大半が欠損している。平棟平造である。20は全長 9.8cmで茎の部分が若干欠損しており、片闊平棟平造。

○鐸：第19図1～3は石室内出土の鐸で全て鉄製で倒卵形を呈する。1は六窓の透穴を有し中心より縁辺の方がやや厚くなっている。径は 7.5cm×6cm。2も六窓の透穴をもつと思われるが約半分欠損している。推定の径は、7cm×5.7cm。3は無窓であり、厚さが1cm前後もある。径は 7cm×5.2cm。

(4)馬具（第17図、第18図1～15）

○轡：第17図

は石室内出土

の轡で、鏡板は

楕円形の鉄棒

製環状、立間

部の鞍具が板

状で舌が取り

つけられてい

るが、左右と

も若干欠損し

ている。衝は

は断面四角形

で両端を環状

に曲げた二連

式のもので

ある。引手は

片方が欠損し

ているが、造

りは衝と同じ

で両端を環状

に曲げたもの

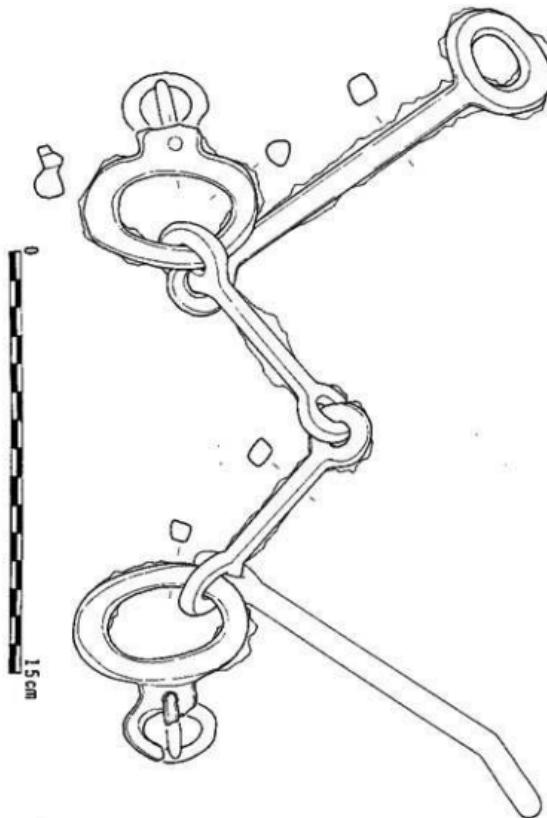
である。

○辻金具：第

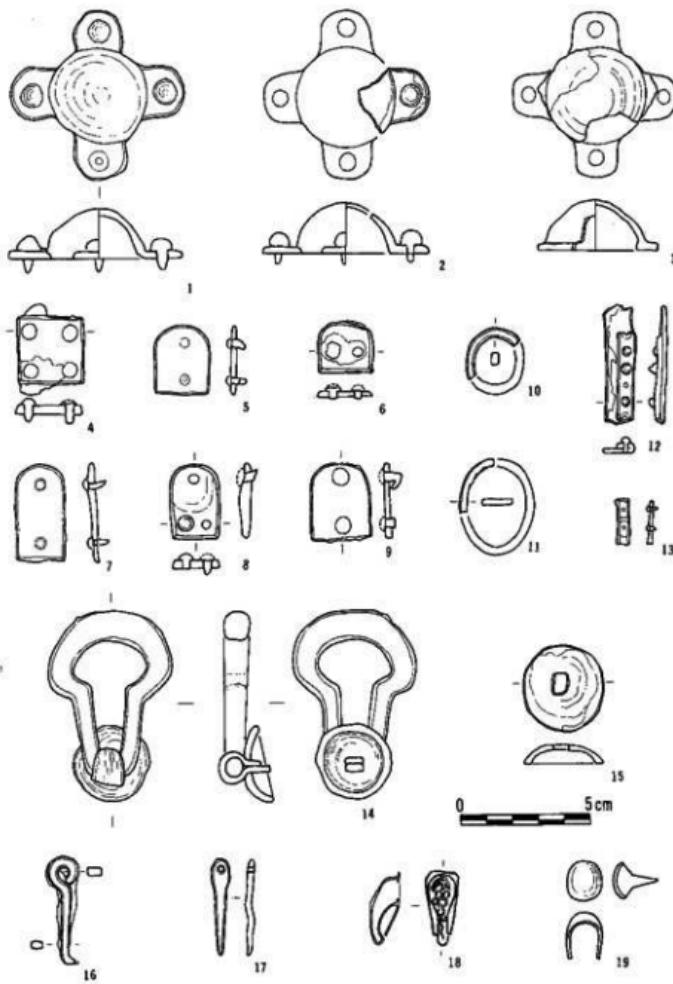
18図1～3は

石室内出土の

辻金具であり、



第17図 轡

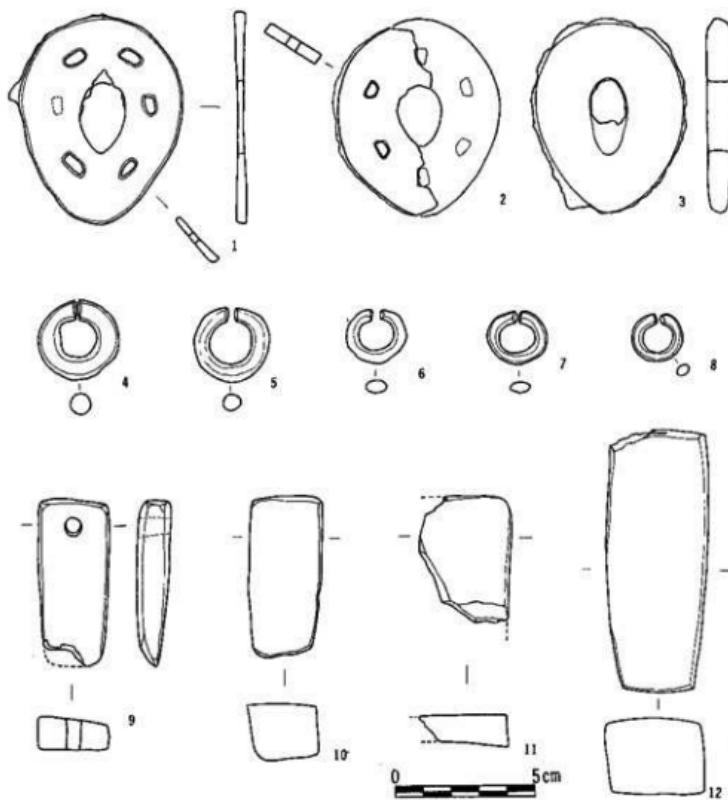


第18図 飾金具及び馬具

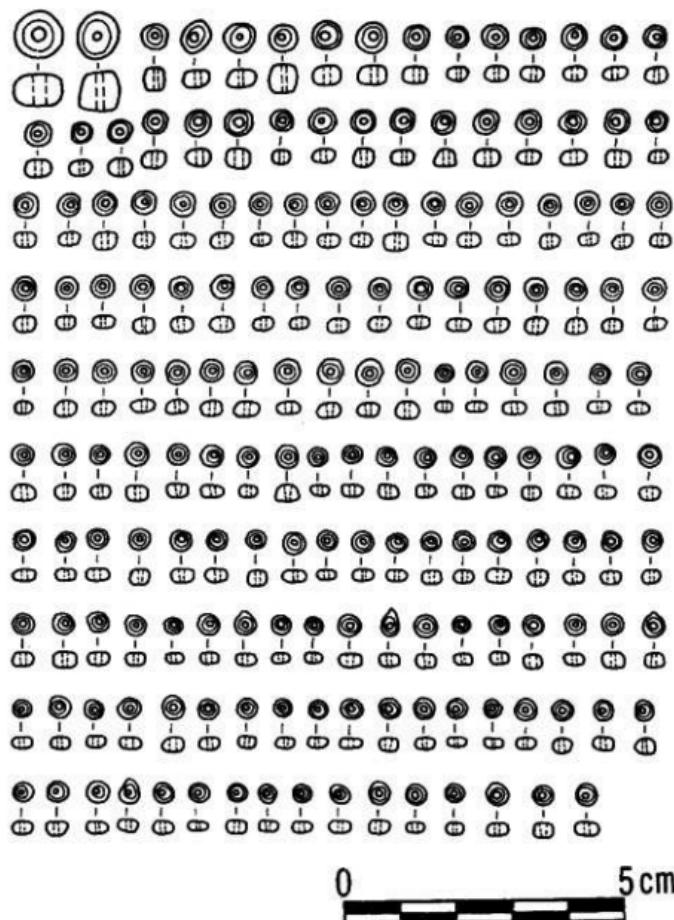
三つとも鉄製で大きさもほぼ等しい。1と2は一部に金銅貼が残っているが、3も含めて元米は全面に金銅貼が為されていたと思われる。ほぼ完形なのは1だけで大きさは底が $6.5\text{cm} \times 6.8\text{cm}$ 、高さ 2cm である。2と3もほとんど同じ大きさであろう。

○鞍：第18図14と15は鞍である。もともと鞍の一部分であるが、鞍を構成する他の遺物は鞍の鍍金具しかない。14は完形で鉄製。鋸びがひどく構造がよく把握できない。15も鉄製であるが半球状の部分を残して他の部分は欠損している。14、15は対を為すものと思われる。なお15は外面のみ金銅貼がみられ、14も同様であったと考えられる。

○飾金具：第18図4～9と12、13の計8点が出土している。全て板状の飾金具である。4は一辺 2.5cm の正方形で鉄地金銅貼、ビョウは四本。5～9は正方形あるいは長方形の一辺を丸く



第19図 鍔、金環、砥石



第20図 ガラス玉(左上から右へ1~171番)

したものでドーム形を呈する。5は鉄製で外面のみ金銅貼、ビョウ二本。6と7は表面の銷がひどく状態は不明確である。どちらも鉄製でビョウは二本ある。8は鉄地で外面のみ金銅貼でビョウは三本。9も鉄製だが腐蝕がはげしく表面は剥落している。ビョウは二本。12と13は飾金具の中でも軽い緑金具である。12は若干弯曲した鉄製の金具であり金銅貼が為されていたと思われる。13も同様である。両者とも完全な形の中のはんの一部分でしかないだろう。

| No | 質 | 色 | 径 | 厚 | No | 質 | 色 | 径 | 厚 | No | 質 | 色 | 径 | 厚 | No | 質 | 色 | 径 | 厚 |
|----|---|---|-----|-----|----|---|---|-----|-----|-----|---|---|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|
| 1 | 青 | 青 | 8.5 | 5 | 44 | 青 | 青 | 2.5 | 87 | 青 | 青 | 4 | 3 | 130 | 青 | 青 | 3.5 | 2.5 | |
| 2 | " | " | 8 | 7.5 | 45 | " | " | 4 | 2.2 | 88 | " | " | 3.5 | 2.2 | 131 | " | " | 4 | 3 |
| 3 | " | " | 5.5 | 4 | 46 | " | " | 3.5 | 2.8 | 89 | " | " | 3.5 | 2.2 | 132 | " | " | 3 | 2 |
| 4 | " | " | 5 | 3 | 47 | " | " | 4 | 2.3 | 90 | " | " | 3.5 | 2 | 133 | " | " | 3 | 2 |
| 5 | " | " | 5.5 | 3 | 48 | " | " | 3.5 | 3 | 91 | " | " | 4 | 3 | 134 | " | " | 3.5 | 3 |
| 6 | " | " | 5 | 5 | 49 | " | " | 4 | 2.3 | 92 | " | " | 3.5 | 2 | 135 | " | " | 3.5 | 2 |
| 7 | " | 黄 | 6 | 3.5 | 50 | " | " | 4 | 3 | 93 | " | " | 3.5 | 2.2 | 136 | " | " | 4 | 2.5 |
| 8 | " | 青 | 5.5 | 3.5 | 51 | " | " | 3.5 | 2.5 | 94 | " | " | 3 | 2.2 | 137 | " | " | 3.5 | 2.5 |
| 9 | " | " | 5 | 3 | 52 | " | " | 4 | 2 | 95 | " | " | 3.5 | 2.2 | 138 | " | " | 3.5 | 2 |
| 10 | " | " | 4 | 3 | 53 | " | " | 4 | 3 | 96 | " | " | 3.5 | 2.2 | 139 | " | " | 3.5 | 2.2 |
| 11 | " | " | 4.5 | 3 | 54 | " | " | 4 | 3 | 97 | " | " | 3.5 | 2 | 140 | " | " | 3.5 | 2 |
| 12 | " | " | 4.5 | 3 | 55 | " | " | 4 | 3 | 98 | " | " | 3.5 | 2.5 | 141 | " | " | 4 | 2 |
| 13 | " | " | 4.5 | 3 | 56 | " | " | 3.5 | 2.5 | 99 | " | " | 4 | 2.2 | 142 | " | " | 4 | 3 |
| 14 | " | " | 4.5 | 3 | 57 | " | " | 3.5 | 2 | 1 | " | " | 3.5 | 2.2 | 143 | " | " | 3.5 | 2.5 |
| 15 | " | " | 5 | 3 | 58 | " | " | 4 | 2.8 | 101 | " | " | 4 | 3 | 144 | " | " | 3 | 2 |
| 16 | " | " | 4.5 | 3 | 59 | " | " | 4 | 2.5 | 102 | " | " | 4 | 2.5 | 145 | " | " | 3 | 2 |
| 17 | " | " | 4 | 3 | 60 | " | " | 4 | 2 | 103 | " | " | 3.5 | 3 | 146 | " | " | 3 | 2 |
| 18 | " | " | 4.5 | 3 | 61 | " | " | 4 | 2.5 | 104 | " | " | 4 | 2.5 | 137 | " | " | 4 | 2 |
| 19 | " | " | 4.5 | 3.5 | 62 | " | " | 4 | 3 | 105 | " | " | 3.5 | 2.8 | 148 | " | " | 3.5 | 3 |
| 20 | " | " | 4.5 | 3 | 63 | " | " | 4 | 3 | 106 | " | " | 4 | 3.5 | 149 | " | " | 3.5 | 2 |
| 21 | " | " | 4.5 | 3.5 | 64 | " | " | 4 | 3 | 107 | " | " | 4 | 2.5 | 150 | " | " | 3.5 | 2 |
| 22 | " | " | 3.5 | 2.5 | 65 | " | " | 3.5 | 3 | 108 | " | " | 3.5 | 3.5 | 151 | " | " | 3.5 | 2 |
| 23 | " | " | 4 | 2.5 | 66 | " | " | 4 | 2.5 | 109 | " | " | 4 | 2.5 | 152 | " | " | 4 | 2 |
| 24 | " | " | 4 | 3 | 67 | " | " | 3.5 | 2.5 | 110 | " | " | 3.5 | 2 | 153 | " | " | 3.5 | 3 |
| 25 | " | " | 4.5 | 3 | 68 | " | " | 4 | 3.3 | 111 | " | " | 4 | 2 | 154 | " | " | 3.5 | 2.2 |
| 26 | " | " | 4 | 3 | 69 | " | " | 4 | 3 | 112 | " | " | 3.5 | 2 | 155 | " | " | 3.5 | 3 |
| 27 | " | " | 4.5 | 3 | 70 | " | " | 4 | 2.2 | 113 | " | " | 3.5 | 2.5 | 156 | " | " | 3.5 | 2.5 |
| 28 | " | " | 4.5 | 3 | 71 | " | " | 4 | 2.5 | 114 | " | " | 4 | 2.5 | 157 | " | " | 4 | 3 |
| 29 | " | " | 4.5 | 3 | 72 | " | " | 3.5 | 2.8 | 115 | " | " | 4 | 2.5 | 158 | " | " | 4 | 2.5 |
| 30 | " | " | 4 | 3 | 73 | " | " | 4 | 3 | 116 | " | " | 3.5 | 3 | 159 | " | " | 3.5 | 3 |
| 31 | " | " | 3.5 | 2.5 | 74 | " | " | 4 | 2.5 | 117 | " | " | 3.5 | 2.5 | 160 | " | " | 3.5 | 2.2 |
| 32 | " | " | 4 | 3 | 75 | " | " | 4.5 | 3.3 | 118 | " | " | 3.5 | 2.5 | 161 | " | " | 3.5 | 2 |
| 33 | " | " | 4 | 2.5 | 76 | " | " | 4.5 | 3 | 119 | " | " | 3 | 2.5 | 162 | " | " | 3.5 | 2.5 |
| 34 | " | " | 4 | 3 | 77 | " | " | 4 | 3 | 120 | " | " | 3.5 | 2.5 | 163 | " | " | 3.3 | 2 |
| 35 | " | " | 4 | 2.5 | 78 | " | " | 3 | 2.8 | 121 | " | " | 4 | 3 | 164 | " | " | 3 | 2.2 |
| 36 | " | " | 4.5 | 3.5 | 79 | " | " | 3.2 | 2 | 122 | " | " | 3.5 | 2.2 | 165 | " | " | 3.5 | 2 |
| 37 | " | " | 4 | 3 | 80 | " | " | 4 | 2.5 | 123 | " | " | 3.5 | 2.5 | 166 | " | " | 4 | 2 |
| 38 | " | " | 4 | 3 | 81 | " | " | 4 | 2.5 | 124 | " | " | 3 | 2 | 167 | " | " | 3.5 | 2 |
| 39 | " | " | 4 | 3 | 82 | " | " | 3.5 | 2 | 125 | " | " | 3.5 | 2 | 168 | " | " | 3 | 2.2 |
| 40 | " | " | 4 | 3 | 83 | " | " | 4 | 2.2 | 126 | " | " | 3.5 | 2.2 | 169 | " | " | 4 | 2.5 |
| 41 | " | " | 4 | 2.5 | 44 | " | " | 4 | 3 | 127 | " | " | 3 | 2 | 170 | " | " | 3.5 | 3 |
| 42 | " | " | 4 | 3 | 85 | " | " | 4 | 3 | 128 | " | " | 3 | 2 | 171 | " | " | 4 | 2.5 |
| 43 | " | " | 4 | 2.2 | 86 | " | " | 3.5 | 2.5 | 129 | " | " | 4 | 2.5 | | | | | |

第2表 二ツ塚1号墳玉類計測表

単位mm

(5) 装身具 (第19図4～8、第20図)

- 金環：第19図4～8の計5個が出土している。全て金銅製であり、4は直径約3cm、5は2.8cm、6は2cm、7は2cm、8は1.7cm。4と5、6と7がそれぞれ対になると思われる。
- 小玉：第20図に示すように計171個の小玉が出土している。全てガラス製であり色調は7の黄色の例を除いてはブルーである。径と厚さは、1と2の大形例を除いて、おおよそ径3.5～4mm、厚さ2～3mmに集中している。ほとんどが閉塗石北の石室内敷石部分より出土している。

(6) 不明金具類 (第18図10、11、16～19)

第18図10、11は鉄製の環状金具であり、11は短かい円筒状を呈する。16は鉄製。17は銅製。18は銅製で金の象眼によって鳳凰と思われる文様がある。19は金銅製の金具であり用途不明。但しこれに類似するものが福岡県の古墳で二例出土している。⁵

(7) 砥石 (第19図9～12)

9は有孔砥石で全面研磨されており、大きさは2.4cm×6cm、厚さ約1.2cm。孔は一方から穿たれている。一端は片刃を有しているが、刃部はやや欠損している。10は表面のみ研磨されており完形品、11は破損品であるが表裏共によく研磨されている。12は若干欠損しているがほぼ完形。裏面以外全てよく使用され研磨されている。

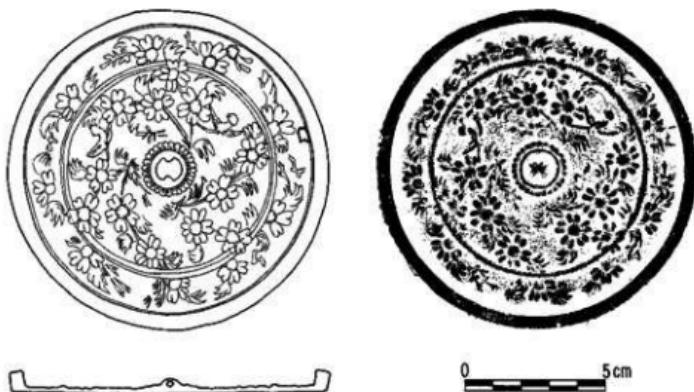
(8) 銅鏡 (第21図)

石室内埋土上層より出土した。やや凸面となっており、右上に穴が二つあけられている。かけ仏とされていたものであろう。鏡面には毛彫等はない。

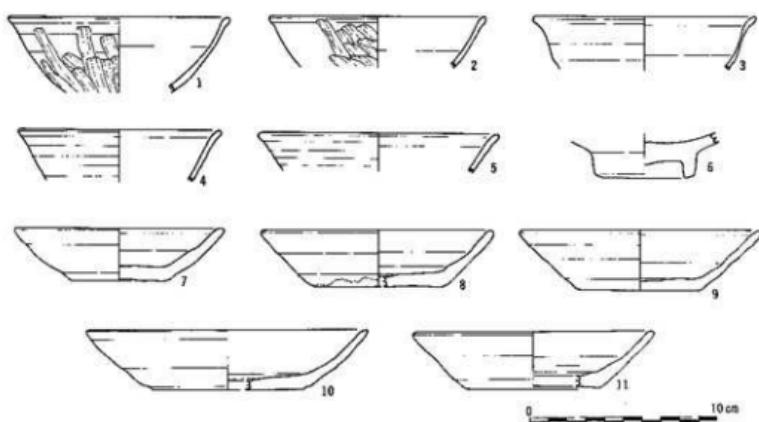
(9) 土師質土器 (第22図7～11、第23図)

石室内埋土中に多量の陶器、磁器及び土師質土器が含まれていた。茶碗、グイのみ、きゅうす、鉢、甕等の陶磁器と、ほうろく、杯等の土師質土器である。これらはいずれも江戸末～昭和にかけてのもので、前出の和鏡に伴う様なものはない。

土師質土器の杯については、既に山梨県内の資料について論じられたものがある⁶。しかし今回の資料では特別は新見知は得ることができなかった。第22図7は口径11.2cm、器高2.8cmで褐色を呈する。内外面共にロクロ水引きであり底部は糸切り底。胎土も焼成も良好。8は口径12.6cm、器高3cmで褐色を呈する。内外面共にロクロ水引きで内面にはススらしいものが付着している。底部は糸切りで、底部からそのわずか上に粘土の折り返しが見られる。胎土は良好。焼成やや軟弱。9は口径13cm、器高3.2cmで赤褐色を呈する。外面にはススが付着している。内外共にロクロ水引きで、底部は糸切り。胎土は細かいが焼成はやや軟弱である。10は口径15.2cm、器高3.2cmで褐色を呈する。内面はススらしいものが付着している。内外共にロク



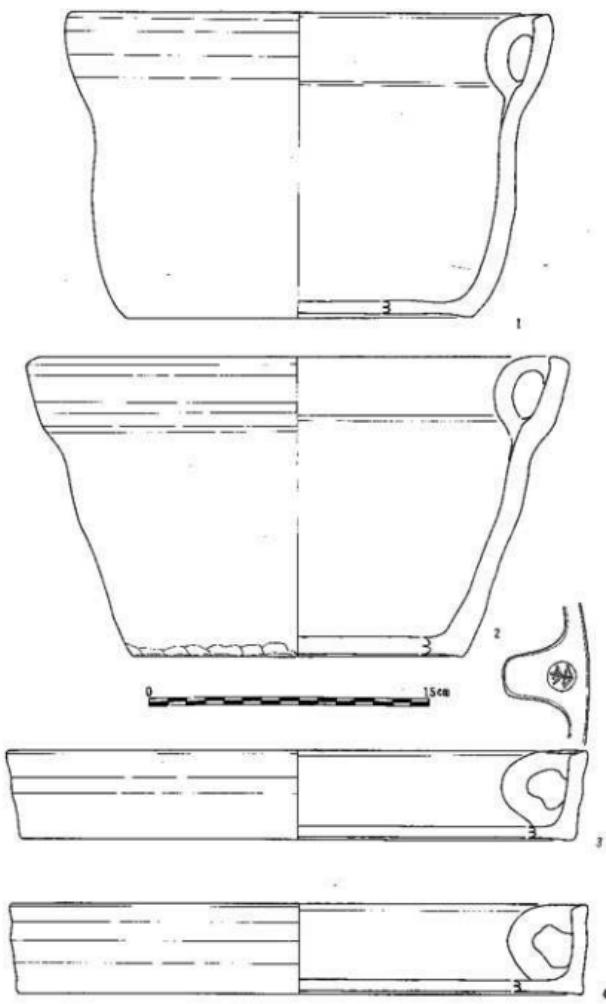
第21図 和 鏡



第22図 土 師 器、土 師 質 土 器(1)

口の水引きであり、底部は糸切り底。胎土も焼成も良好である。11は口径12.6cm、器高3cmで内面はススが付着して黒色、外面は暗褐色を呈する。内外面ともロクロ水引きで、底部は糸切り底。胎土も焼成も良好である。なお第22図6は墳丘北側溝出土の青磁である。

内耳士器は完全に復原できるものは存在しなかったが、盤形（第23図3、4）と鉢形（同1、2）の二種類がある。1は口径24.6cm、器高16.4cmで内外面ともススが付着して黒色を呈す

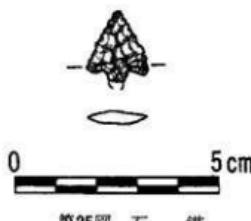


第23図 土師質土器(2)

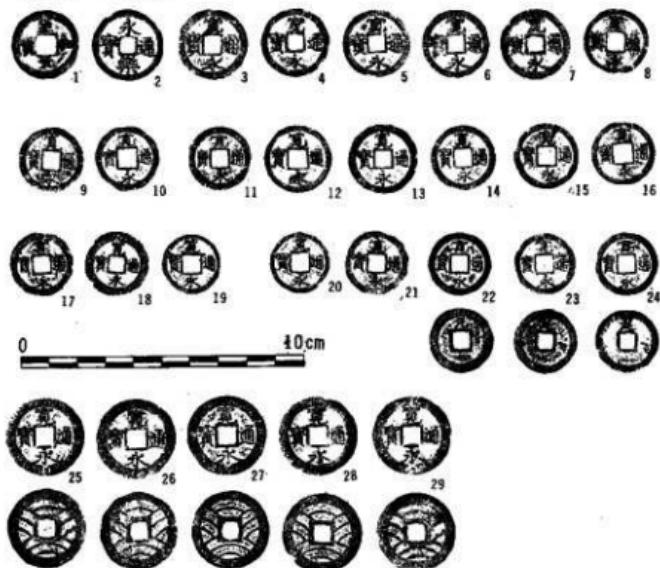
る。外面は口縁付辺横ナデ
以下には指頭痕が見られる。
内面は刷毛横ナデ。底部に
は板目がある。2は口径29
cm、器高16cmで外面はスス
が付着して黒色、内面は瓦
色を呈する。外面は口縁部
付辺は刷毛横ナデ、以下は
指頭の压痕が見られ、内面
刷毛横ナデ。底部には粘土
の折り返しの痕がある。3
は口径31cm、器高4.8cm、外
面は横ナデの後にヘラ磨き
されており、内面もヘラ磨
き。4は口径31.2cm、器高
4.7cmで外面はススが付着



第24図 石 幷



第25図 石 鐵



第26図 古 錢

し黒色、内面は瓦色を呈する。内外面共ヘラ磨きで、内耳上部に刻印がみられる。以上の内耳土器は、胎土に荒い粒子を多く含み、底部には板目が残っており、成形後すぐに板の上に置いて乾燥させたことによる。

⑩古銭（第26図）

本墳より出土した古銭はそのほとんどが石室内より出土している。その層位は石室を埋めている焼土と、その上の近世陶磁器を出土する層から集中して発見された。内訳は、至和元寶1(1)、永樂通寶1(2)、寛永通寶36(3~29)、二銭銅貨1(明治13年)、一銭アルミ貨(昭和16年)である。寛永通寶のうち裏面に「足」と鋳出してあるものが4枚、青海波が鋳出してあるもの5枚である。

⑪縄文時代の遺物（第24、25図）

24図は墳丘東側セクショントレンチ内から出土した打製石斧で、大形剥片の頭部と両側面から剥離を施こし、短冊形に整えられている。ホルンフェルス製。

第25図は墳丘中段にめぐる配石東側中央部から出土したもので、茎部を欠損するが有茎の石錠である。表裏全体に丁寧に剥離が施されている。黒曜石製。
(米田明訓)

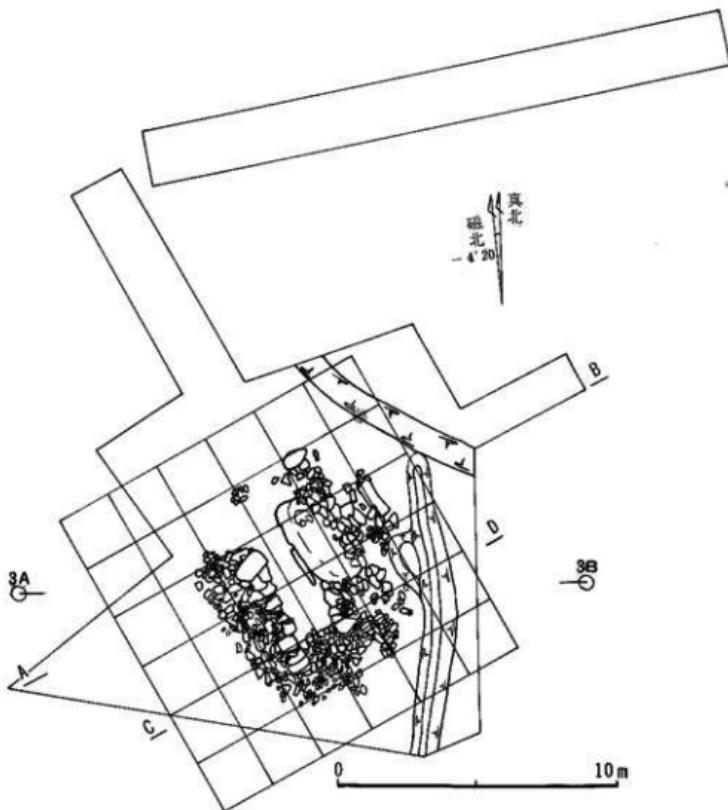
註

- (1)本墳と同じ赤坂台古墳群の竜王3号墳(昭52年調査未報告)では閉塞石中より国分期の土師器のみ検出され、石室内より国分期の人骨と多量の土師器(副葬品か?)が発見されている。閉塞石が国分期に積み直されたことは明白である。
- (2)後藤守——昭和14年 「上古時代鉄鏃の年代研究」人類学雑誌54—4
- (3)『竹原古墳—金丸古墳』 福岡県鞍手郡若宮町教育委員会 昭和50年
『朝倉孤塚古墳』『福岡県文化財報告書17』福岡県教育委員会 昭和29年
- (4)末木 健一昭和51年「平安時代以降の土師質土器の編年について」信濃28巻9号

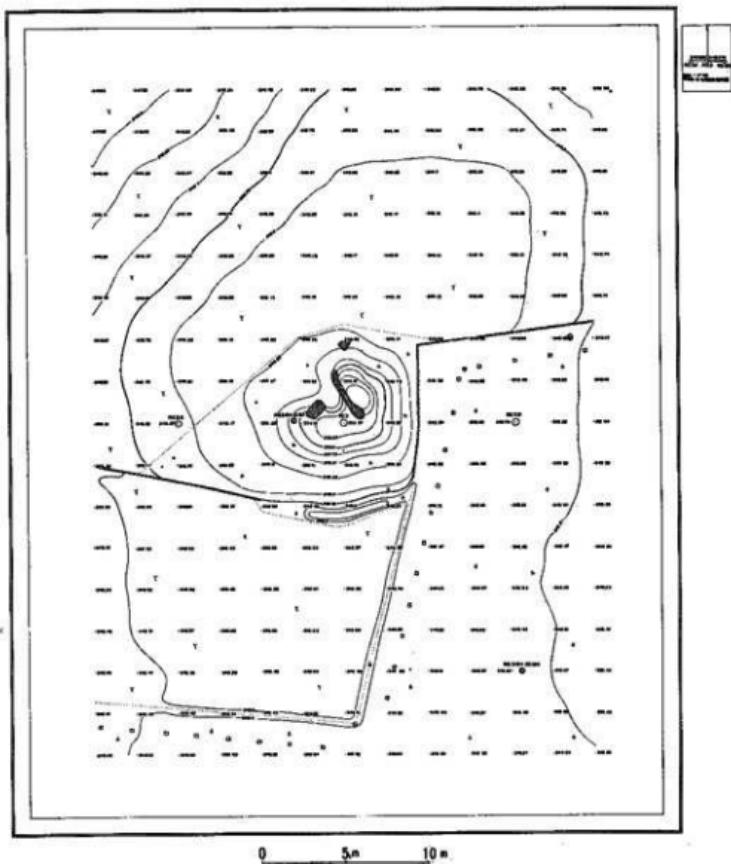
第2節 双葉2号墳

1. 墓丘、石室構造

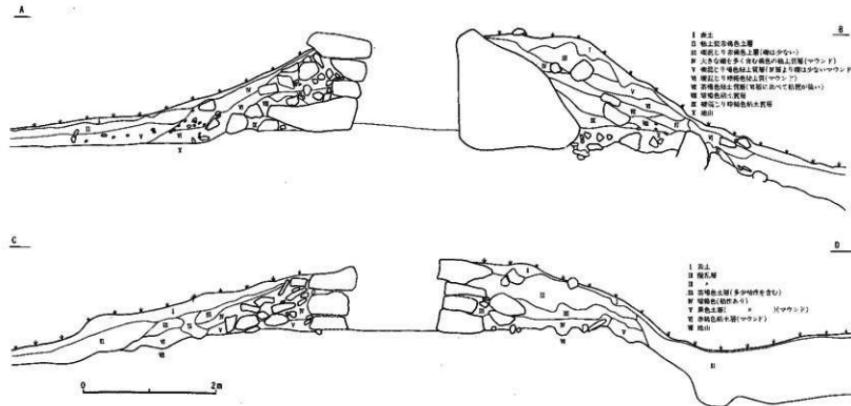
北巨摩郡双葉町下今井字立間2557-1番地に所在するこの古墳は赤坂台上の小丘標高 349m の頂を利用して築造される。周辺は桑畠、ぶどう園で、古墳の部分のみ雑木林となっていた。奥壁部は開墾を受け削平されている。



第27図 双葉2号墳全体平面図



第28図 双葉古墳 2号現況平面図



第29図 双葉2号墳土層断面図

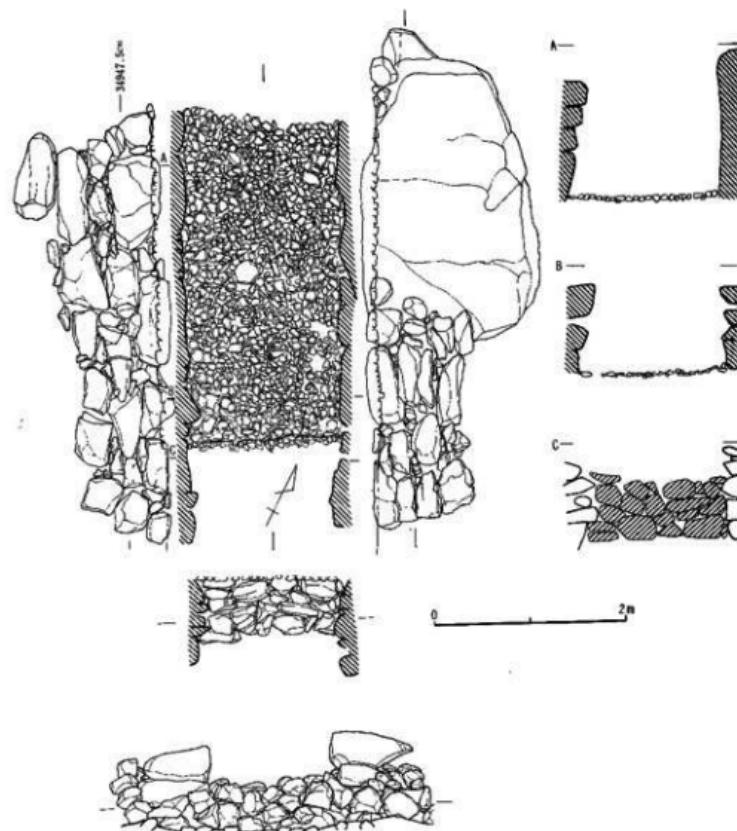


第30図 石室平面図

(墳丘)

現存する古墳の外形は東西10m、南北8m、墳丘の高さは約2mで、奥壁部分はない。本来の古墳の直径は15m前後、高さ2.5~3mを計るものと推定される。調査によって確たる周溝又は墳丘根石等は認められなかつたが円墳としてよかろう。

古墳は原地形である小丘を削平し石室を造っているが、その削平部は極く少なく、古墳石室中央部は地上に根石を措えるが、奥壁及び嵌門部は旧表土と思われる黒色土(約10cmの厚さ)上に積まれる。この黒色土は極く固くしめつけられており、古墳構造の為に整地したことがう



第31図 双葉2号墳石室展開図

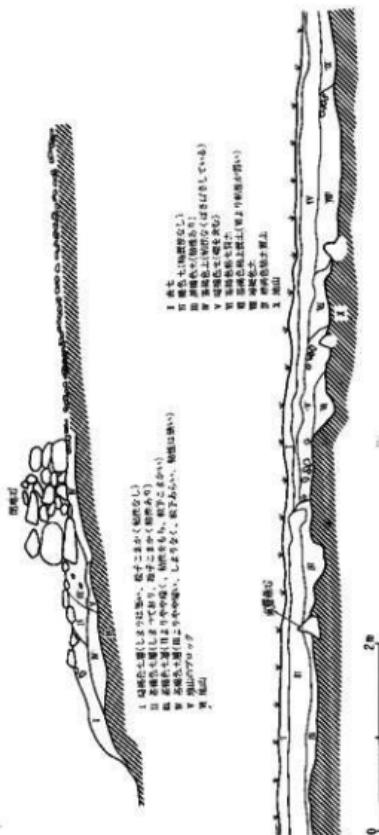
かがえる。現在では盛土のほとんどが削られているものの、一部には盛土作業の工程が断面図で把えられている。盛土はやや傾斜して積まれ、黒色土と赤褐色土が交互に盛られている。各層をこまかく見ると、もっこで運んだ様にそれぞれレンズ状の断面をもち、裏込石の外側を支えている。盛土そのものには礫をあまり含まないが、赤褐色土には地山に含まれていた小角礫が若干入っており、盛土の下層に多い。それぞれの土は強くしめられており、裏込石の間に含まれる土の硬度とは全く異なる。

周辺にトレンチを十字に設定したが周溝は存在せず、盛土は古墳周囲の土を全体に削って得たものであり、盛土以上に古墳を高く見せる意図が働いていたものと思われる。

(内部施設)

石室は盛土の中心にあってN-28°-Wの主軸をもち、無袖横穴式石室である。天井はすべて原位置を保たず、一枚は石室内に二つに割れて落ち込み、もう一枚は前庭部東側に置かれていた。他の天井石はすべて遠方へ持ち出されたか割石とされ周辺の石垣に利用されているものであろう。又奥壁及び奥壁から1~2mの側壁は開墾の為に削り取られ床礎もない。しかし幸いなり、その石組は主軸に直交して約1m、主礎、東側に40×20cmの礎を1つ、南に同様表土黒褐色土を掘り溝め、この上に奥壁を

奥壁前面より渾門までの長さは東側壁6m、西側壁6m、主軸でも6mを図る。渾門部間146cm、中央部155cmを計ることから、奥にゆくにしたがってやや広がる台形を呈する。床面には10cm内外の角障子を敷き詰める硬床を呈し、奥壁近辺は削平され現存せず。閉塞石の内側に若干入り



第32図 石室南北断面図

込んでいる他は敷かれていない。礫床のレベルは現存する北側と南では約10cm程南に傾斜している。このことから閉塞石を一部積んだ後に礫床を形成したことが理解される。又床は側壁根石下部よりもやや高く、側壁が床面礫を部分的にかんでいることから、側壁はその自重で若干沈んでいる。

側壁の石は安山岩山石を割って使用しており、割石乱石積と呼べる。石は小口積で持送りが見られ、上部巾がやや狭くなる。東壁北側には長さ3m余、高さ2m、巾2mの断面三角形の巨石が在り、その南側門にかけて縦横に日の通る通目積にされた壁が四段積まれる。この巨石が人力によってこの地に運搬されたものか、あるいはこの地域の所々に見られる様な小丘上に露頭した自然石なのかは調査結果からでも明白できないが、周辺の地山内山石の状態から後者を加工して利用したものと考えられる。西壁は不揃な割石を三段に積んでいる。小口積の互目積に近い感じであるが、東壁と同様に小礫を間にはさんで安定させている。

閉塞石は奥壁内面より約5mの所に内側が積まれ、奥門より外側に一列積み出している。小口積で内外面ともに丁寧に積まれているが、この間には適當な角礫が投げ込まれた様な状態である。現存する巾は1.3m、高さ60cmで床面に密着しておかれている。

前庭部の範囲は不明確であるが、現存しているテラス状の面が前庭と考えられ、不規則に石が敷かれる。拳大及び人頭大の角礫が散乱する部分もあり、攪乱を受けたものと推定される。テラス状の面はやや南面傾斜している。

石室の裏込石の状態は東西両側で異っており、東側巨石裏側には比較的大きな石が積まれているが、巨石よりやや離れて積まれる。又、入口部付近ではほとんど裏込めのない部分があり、ここは土も柔らかかったので、攪乱を受けているものであろう。西側では外側に大きな礫を積み上げ、側壁との間には土と小礫を多く詰め込んでいる。裏込石外積にはやや大きめな石で囲い、全景は人頭半截形となっている。

(佐野勝広、木木 健)

2、双葉2号墳出土遺物

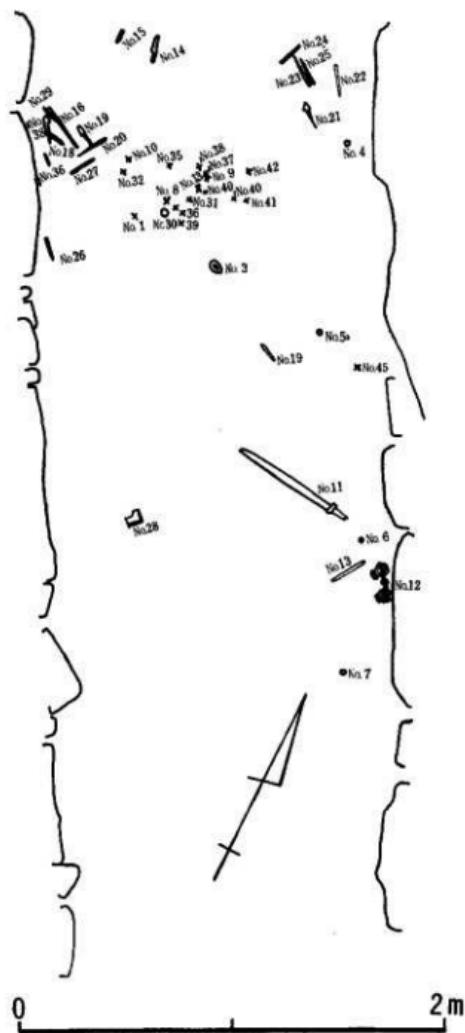
双葉2号墳から出土した遺物は武器類、装身具類、土器類、その他で、石室は大きく破壊されており、奥壁側の約2/3ほどが除去されてしまっていた。このため出土した遺物が副葬品の總てであるかは疑問である。遺物の平面分布から大略3ヶ所ほどのかたより（群）がみられるが通じて側壁に接するように位置している。垂直分布では敷石上数cmから敷石直上に大部分の遺物が集中しており、敷石中や下に少数の玉類が入り込んだ状態で検出された。

武器類

武器類の内訳は直刀1振、刀装具、刀子3本、鉄鎌17本が出土した。

直刀（第33図1）

直刀は閉塞部付近で石室長軸に対して斜めに、茎を東側、刃部を北に向けた状態で出土した。



第28図 双塚2号墳遺物出土位置図

形態は素大刀身で、現存長60.3cm、関部幅3.2cm、重ね0.6cm、基部長さ8.2cmを計り、基端部をいくぶん欠く。両関有段式、平棟造りである。基端部近くに径0.5cmほどの目釘孔が一孔ある。刀身には僅かに内反りが見られる。関部に断面倒卵形の鎔が正規の状態とは逆に装着されている。鎔幅1.3cm、厚さ0.25cmで、長径3.55cm、短径2cmである。

刀装具（第35図2）

刀装具は鎔だけであり、奥壁側中央で単独で出土した。長径6.3cm、短径4.25cmの倒卵形で窓はない。断面形は縁辺部で、0.3cm、基部孔部で0.2cmの細長い台形状を呈し、鎔全体に反りが見られる。基部孔は長径2.9cm、短径1.65cmであるが、第34図1の直刀装具であるかは不明である。

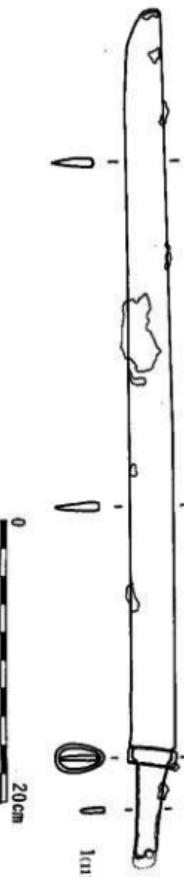
刀子（第35図3～5）

刀子は計3本出土し、3は石室内覆土中より、4～5は奥壁側の敷石状から鉄錠群とやや間隔をあけて、並んだ状態で出土した。3は刀身部片で現存長4.5cm、幅1.5cm、重ね0.35cmである。4は切先部を欠損しているが形態の伺えるものである。現存長11.4cm、関幅1.4cm、重ね0.25cmの片関式のものである。なお、茎のある4～5には目釘孔は見あたらなかった。

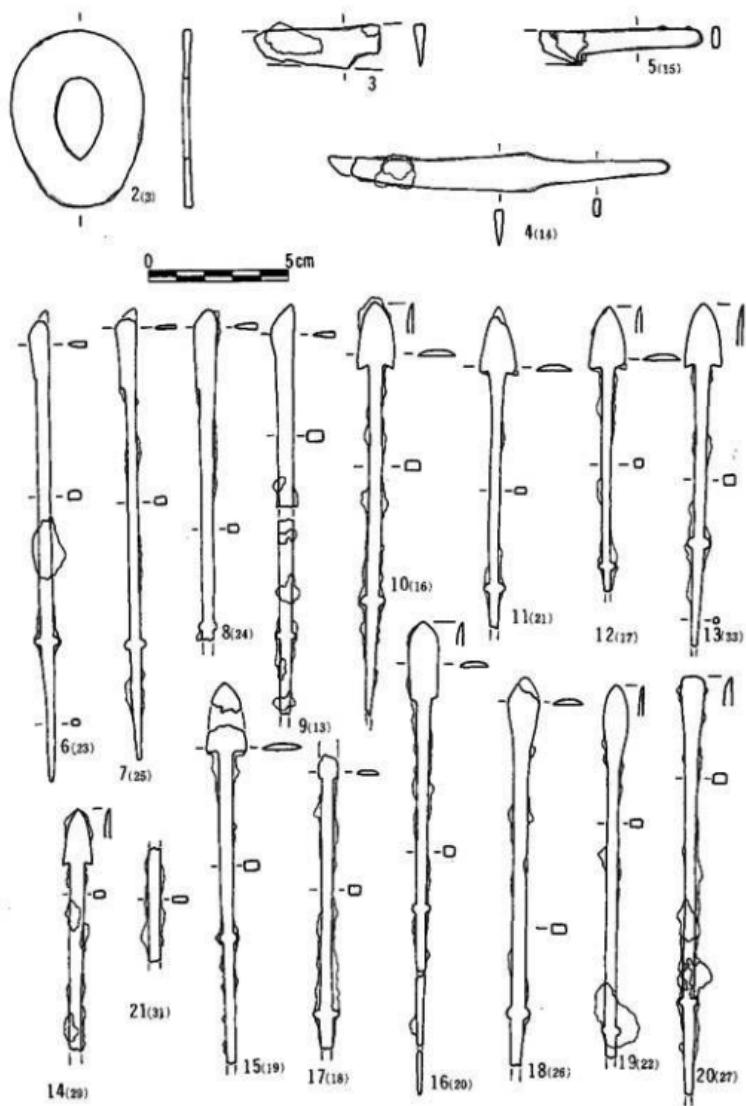
鉄鎔（第35図6～21）

鉄鎔は17本を数え、武器類では最も個体数の多い遺物であり3群に分れて出土している。奥壁側の東西側壁に接するように位置する2群と、中央部から閉塞にかけて東壁に接する1群がある。図示したもので形態の不明な21を除くと、他のものすべては尖根式に属し、有茎の刺範被を有するものである。頭部から刺範被までの基部は断面長方形、あるいは方形であるが、刺範被から末端部にかけて次第に細くなり、断面円形になるのが一般的な形態のようである。

出土した鉄鎔は3形式に分類でき、6～9は刺範被片刃箭式に属し、6～8は刺範被片關片刃箭式、9は刺範被端片刃箭式であり、造りは平造りである。10～15は刺範被三角形式で、10～14は片丸造り刺範被陽抉三角形式、15は広鋒丸造刺範被腹抉三角形式である。10、13～15は11～12にくらべ僅に刃部（ふくら）が外湾する傾向がみられる。16～20は刺範被整箭式に属し16は両關片丸造刺範被整箭式、17は切先部を欠くが同一の型式と想われる。18～20は關無片丸造刺範被整箭式であるが、切先の形が圭頭状のもの（18）と、円頭状のもの（20）の種類があ



第34図 双葉2号墳出土
直刀〔()内出土番号〕



第35図 双葉古墳 2号出土武具〔()内出土番号〕

る。21は茎部の破片である。他に図示しなかったが21と同様の基部小片が1点ある。

鉄錠の型式別の分布状態はみられず、各型式が各群に見られる状態であり、原位置での向き等にも統一的な面はみられず、埋葬された状態（置かれた状態）は看取できなかった。

馬具類（第36図22）

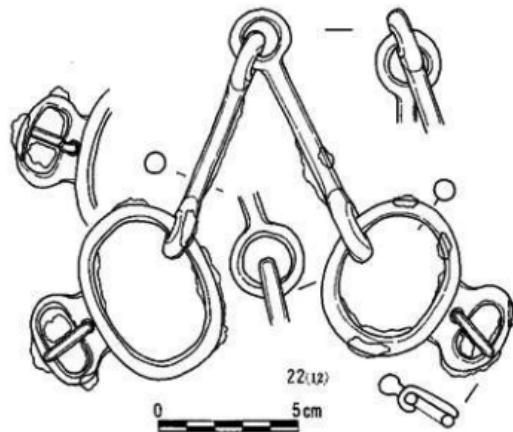
馬具類としては轡が、閉塞近くの東側壁隅から敷石に付着した状態で出土した。形態は引手が付属していないものである。轡は径 0.7cm の断面円形の鉄棒製で、鉄棒の両端を環状にしたものと 2 連、接続したものであり、両端の環状部分に鏡板が挿入されている。鏡板は径 0.8cm の断面円形の鉄棒製（楕円形）で、立間部に鋲具が作り出されている。

装身具類

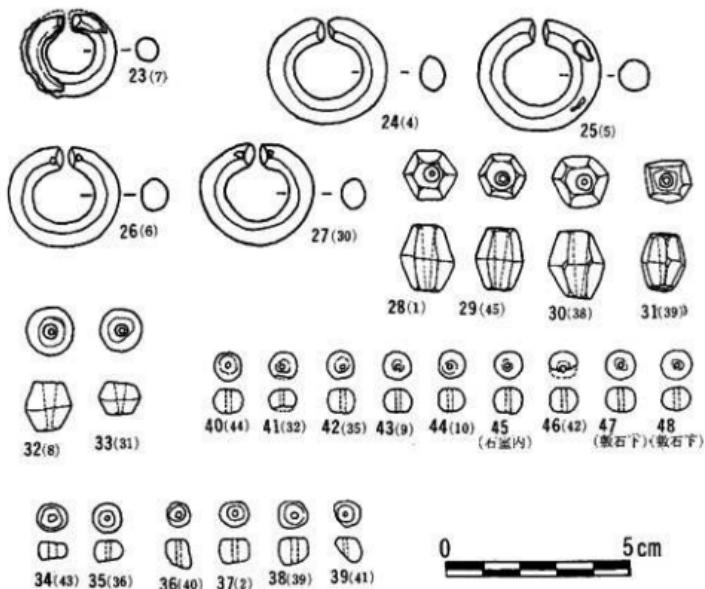
本墳より出土した装身具類は金属製装身具と玉類であり、前者は耳環のみであるが、後者は少量ずつ数種類が出土した。すべては石室内よりの出土である。耳環は 4 点が東側壁に近いところに別々に点在しており、他 1 点が玉類集中個所よりの出土である。玉類は奥壁側中央部に集中して検出されたが、遺物群としては西側壁の一群に含まれる。他に 1 点ではあるが、東側壁中央部から切子玉が検出されている。

耳環（第37図23～27）

耳環は全部で 5 点出土しており、すべてがいわゆる金環である。23は腐蝕が著しく、芯が半分ほど露出しているもので、長径 2.5cm のほぼ円形の環状を呈し、断面形は径 0.6cm の円形である。24は長径 3.2cm、短径 2.8cm の環状で、断面図はやや凸レンズ状の楕円形で長径 0.9cm、短径 0.7cm である。25は長径 3.3cm、短径 3.0cm の環状を呈し、断面形は径 0.8cm のほぼ円形である。24～25はやや状態が悪く、ところどころ表面が剥離していたり、鍍が浮いている。26は長径 3.0cm、短径 2.7cm の楕円形を呈する。27は長径 3.15cm、短径 2.7cm の環状であり、断面形は長径 0.8cm、短径 0.65cm の楕円形である。26～27の状態は非常に良好であり、腐蝕部分は僅にみられるだけである。環状にされた両端部の間隔は 0.25～0.1cm ほどの巾に腐蝕して不明の 23 を除き、4 点が含まれ



第36図 双葉2号墳出土轡



第37図 双葉古墳出土装身具(()内は出土番号)

0.2cmのものが2点見られた。また蔵触状態、大きさ、造り等から、24、25で一対、26、27で一対になるものと考えられる。

切子玉（第37図28~31）

切子玉は4点出土し、石質はすべて水晶製である。横断面の形状は3点が六角形で、他1点が五角形である。穿孔はすべて一方方向から施されており、それぞれに穿孔完成の際に生ずる貫通剝離が認められる。28は長さが1.75cmで、最大幅は1.4cm。29は長さ1.65cmで最大幅は1.3cm。30は長さが1.8cmで、最大幅は1.5cm。31は長さが1.55cmで最大幅が1.25cmをそれぞれ計る。大きさは個々別々であるが、大きな差異はなく、ほぼ均一の大きさと言えよう。穿孔は最大径が0.45~0.3cmの間で、最小径は0.15~0.1cmであり、すべて中心からややそれで施されている。研磨は良好であるが材質の粗悪のもの（31）があり、面取りが十分に行なわれておらず、角が鈍角のもの（29~31）や、とり抜なった部分のあるもの（30~31）がある。

算盤玉（第37図32～33）

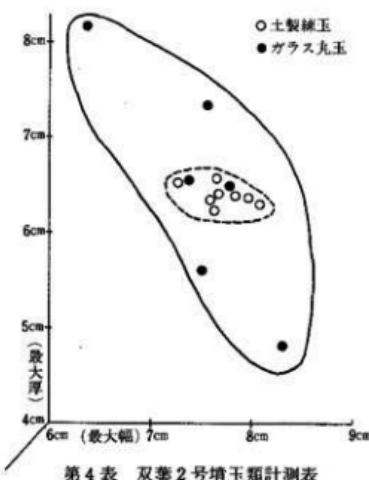
水晶製の算盤玉が2点出土した。切子玉と同様に穿孔は一方から施され、穿孔完成の際に生ずる貫通剝離が認められる。32は長さが1.35cm、最大幅での横断面形は、径1.25cmの円形。33は長さ0.85cmで、最大幅での横断面形は径1.1cmの円形であり、両者は長さが著しく異なる。穿孔は32が最大径0.4cmで、最小径が0.1cm。33は最大径が0.3cm、最小径が0.15cmである。さらに面取りで表出させている最大幅での横ラインが、2点共に曲線であり面取りが充分でない。

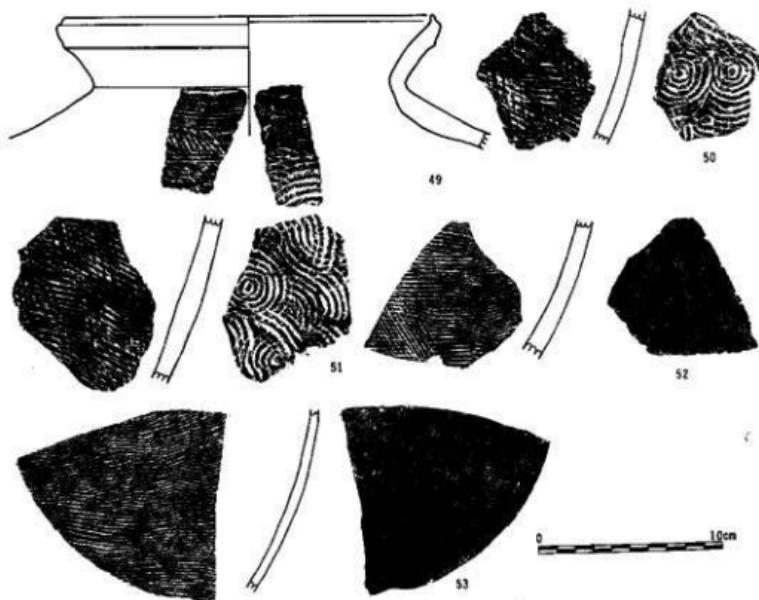
小玉（第37図34～48）

小玉にはガラス製のものと粘土を焼いた土玉がある。前者は6点、後者は11点出土しているが、後者で欠損品のため図示できないものが2点ある。したがって17点出土したがそのうち15点を図示した。34～39までがガラス製小玉で、厚さは0.46cm～0.805cmまで、幅は0.645cm～0.82cmまであり、大きさは一定でない。孔径は0.16cm～0.1cmまであり、0.1cmのものは1点のみで、一定している。色調は35が淡青色で、他が濃青色である。40～48までは粘土製小玉であり、色調は茶褐色～黒褐色を呈し、いずれも比較的堅緻であり、胎土も良く精選されている。大きさは一定の数値を示し、厚さが0.61cm～0.65cmの間、幅は0.715cm～0.81cmまでであった。孔径も0.14cm～0.1cmと一定の大きさである。ガラス製小玉と粘土製小玉の大きさは、前者が個々別々であるのにくらべ後者は均一の数値であることが指摘できる。さらにはばらつきのあるガラス製小玉の中くらいの大きさに、粘土製小玉が位置することも指摘できる（第4表参照）。しかし孔径数値は両者共に良く一致していることも事実である。したがってこのような数値上の位置と、孔径の一一致は、ガラス製小玉より容易に製作できる粘土製小玉の利点と性格が暗示され、ガラス製小玉を模倣し同様の状態で使用されたものであろうと推察される。

土器類（第38図49～53）

石室からの土器類の出土は須恵器片が數片出土しただけであり、後世に持ち出された可能性が強い。他に墳丘表土、前底部付辺より須恵器壊破片が出土したが、器形の推定できるものは皆無であった。49は口縁部の推定復元で、口径約20.2cmである。口縁部と内面は横ナデ調整で丁寧に整形されている。頭部以下は内面青海波の叩き目が施されるが、外面は板目状である。口縁は段をつけて拡張されている。50～52は同一個体と思われるもので、全体的に焼成の良くな





第38図 双葉古墳出土須恵器

ない個体である。53～54も同一個体のものと思われる。器で外面は板目状の叩き目を施こし、内面は叩き目を施した後に横ナデを施して丁寧に調整されている。胎土、焼成共に良好である。他に40片余りの破片が出土しているが、ほぼこの2個体の變の破片と思われる。

その他の出土遺物（第39、40図54～59）

その他の遺物としては、縄文土器、石斧、石鎌、剝片、打製石器、銅錢が墳丘、石室内より出土している。土器片は7点が出土しており、縄文時代中期に属するものと思われる。表面は相当磨滅した状態であり、胎土には砂粒を多量に含んでおりザラザラとしている。色調は赤褐色を呈している。いずれも曾利期のものとして良いと思われる。

54は前庭部付近の表土から出土した打製石斧である。大形剝片の頭部（打点側）と両側縁部に剥離を表裏両面にわたり施こし、やや抉りのはいった撥型の形態に整えられている。全体的に風化が著しい。ホルンフェルス製。55～56は石鎌であり、55が墳丘中から、56が石室内覆土からそれぞれ出土した。2点共に無柄のものであり、55が尖端部を欠損し、56は逆剥部分のみである。黒曜石製。剝片は墳丘、石室内より計8点出土したが、そのうちの1点を57に図示した。黒曜石の角礫から剥離された大形剝片で、表面上に存在する剥離痕を切って剥離されてい



第39図 双葉2号墳出土打製石斧
る。石室内出土。なお、他剣片に接合はしなかったが、同様の角礫剣片が出土している。58は先土器時代に属する可能性のあるもので、墳丘下の旧表土、あるいはそれ以下から出

土した。尖端部と下半部を欠くが、柳葉形を呈すると考えられる尖頭器である。剝離は表裏にわたり丁寧に施され、断面凸レンズ状を呈する。チャート製。59は石室内より出土した明錢の洪武通宝である。明太祖洪武元年（1368年）に鋳造され、本例には刻されていないが、背面に鋳造地の記し（浙、福、一等）があったり、形の大小があって種類が多い。日本では永樂通宝などと共に多く流布したものである。

遺物小結

以上双葉2号墳の出土遺物について概観してきた。石室の上半部と奥壁側が約半ほど除去されてしまっていたが、このような後期古墳の中に一般的に副葬されている武器、馬具、装身具類という、土器類を除く多種の遺物が検出された。しかし、これらの遺物は一時的な（副葬された）状態で遺存していたとは、直刀、銅、耳環等の出土状態が不自然なことから考えがたく、石室内が後世に乱された可能性が強い。石室内から明錢が出土していることもこれを裏づけると想われる。したがって、破壊された奥壁部分も含めて考えると概観した遺物が、副葬されていたものすべてではないと、考えられる。また、出土した遺物から（耳環）埋葬された遺物は3体以上と考えられるが、骨片、歯、骨粉等の出土は皆無であった。なお、出土位置については遺物平面図（第33図）を参照されたい。

さらに縄文時代遺物が発見されたことによって、この台地上に縄文時代の遺構が存在する可能性がでてきた。このため、古墳周辺及び、墳丘北側に幅2m、長さ21mのトレンチをほぼ

東西に設定して発掘したが、一片の土器をも得ることができなかつたし、遺構の確認もできなかつた。したがつて、墳丘、石室内流入上より出土した縄文土器は、墳丘の土を得た土地から、はこばれたものであろうとの結論となつた。

(伊藤伊彦)

註 1. 鉄鎌の分類は後藤守一(1939)「上古時代の年代研究」人類学雑誌、第54卷第4号に従つた。

第3節 宇津谷無名塚

北巨摩郡双葉町宗津谷字横道下1540番地に所在する。中央道建設予定地内ステーション NO 280+50の東、茅ヶ岳の裾野標高381mがこの塚の位置である。

この付近は裾野が河川によって開折を受け、扇形の台地状尾根を形成しているが、その巾は広く東の東沢と西のろくたん川の間は約 1.1km を計り谷との比高は30m ある。この台地は山梨県地質誌によれば高位段丘とされており、茅ヶ岳火砕流による台地状地形を呈している。この扇状台地の先端には瘤隆突起様の小山があり、宇津谷古墳と考えたこの場所もそうした突起の一つと思われる。この突起上や平坦面に巨石が露頭している所が多くあり、北側の笠石部落はその名の起りが笠に似た巨石の存在するためにあるとされるなど、このあたりの地表の特質とも言えるものである。

一般的に表土、耕作土が浅く、10~20cmで粘性の強い火山灰土が現われる。

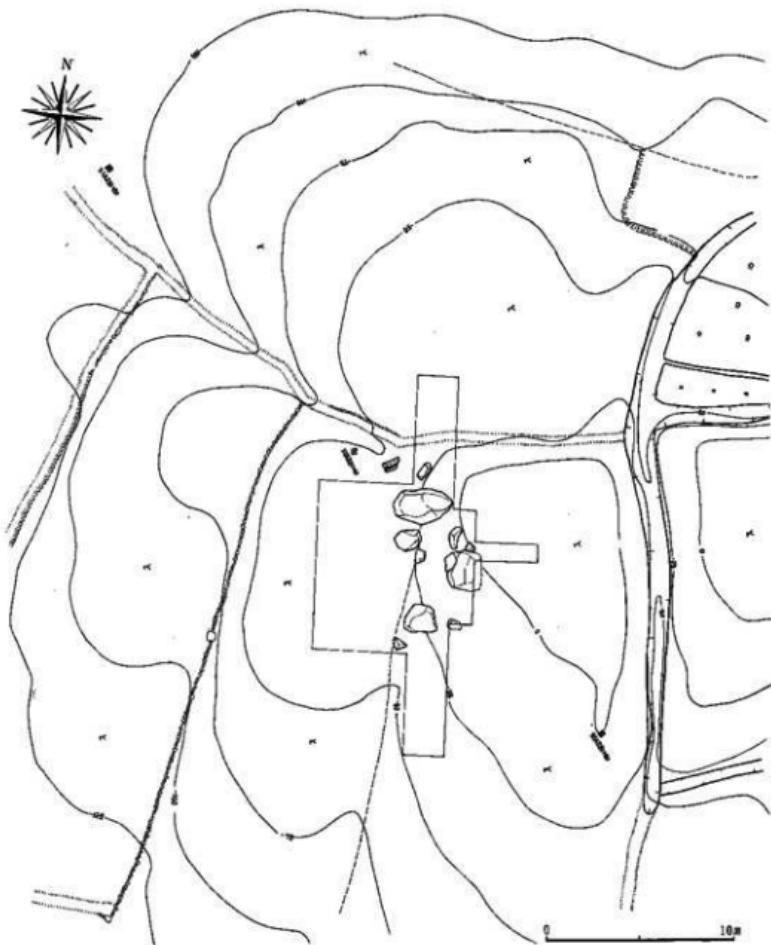
宇津谷古墳は昭和47年に実施した分布調査の報告でも言われている様に、古墳であるかどうか疑問視されていた。結論的に言ふなら、今回の調査においても古墳である事実が発見されなかつたし、石組状態も古墳として充分なものではなかつた。南面する巨石を奥壁に見、南に2列に並ぶ石組が側壁のようであったが、奥壁としては石が厚すぎたり、側壁の石としては大きすぎるといった結果がでている。

調査は2度に分けて行った。まず第41図に示した様に南北トレンチ及び東側のトレンチを設定し、昭和51年9月25日~10月1日まで発掘を行なつた。この段階で奥壁及び側壁と考えたところの石が通常見られる古墳構築法にのらず、地山に食い込む様な姿で掘り出されている。又、第二次調査を昭和52年3月25日~3月28日まで行ない、西側部分の精査を実施した。結果的には第一次調査と同様で、古墳と考えるには困難な遺構であろう。

ここからの遺物のほとんどが近現代の陶磁器と、土器質土器1、2片であり、特筆すべきものはない。

又、調査を第一次と二次に分けたのは用地買収の進行に合わせて進めた結果である。

(末木)



第41図 宇津谷無名填地形図

第3章 考察

第1節 石室構造について

1. a. 石室の形状

二ツ塚1号、双葉2号墳は共に横穴式石室を備えた古墳であったが、両墳共上半部が破壊されており、石材は持ち出されていた。このため石室根石から数段の石積みが遺存していたに留まり、天井部の形状は不明である。床平面は両墳共に狭長な長方形を呈し、羨道部の区分も不明であった。二ツ塚1号墳の側壁は1段から多いところで3段ほどであり、羨門に近づくにつれて石材は小さくなる。羨門¹⁴は割合大きめの石材を使用して構築し、形態を意識的に整えている。根石は全体的には大形の石材で構成され、その下には意識的に小礫を入れて、形態が整えられている。奥壁に接する左右の根石は広口積みで、羨門が、小口積み、中央部は横口、小口積み¹⁵が併用されて構築されているようである。中段から上段にかけては横口積みと小口積みが半々ぐらいの状態で構築され、羨門に移行するにしたがい小口積みが多くなる傾向があり持送式に石室空間を狭めながら、内側に重心がかからないように、意識的に小口積みが採用されているようである。奥壁は広口積みで側壁にもたれかかるように内傾して構築され、基部下には人頭大以上の石材を入れてあった。敷石は大部分が後世にはがされ、側壁に接する部分が少量遺存していただけであった。双葉2号墳の石室は上半部と奥壁側が石室の約二分の一破壊されていたが、側壁は大略4段ぐらい遺存していた。本墳は石室構造上やや特異な形狀を備えており、一般的な形狀とは異なる。それは數々¹⁶もあるかとという曰く大な石材が東壁の過半を占めていることであり、これによって石室の形狀も規制されてしまっているようである。したがって側壁はこの石材の内面の傾きに合わせ緩慢な持送式で、やや内傾する程度であり、垂直に近い壁面が構築されていた。この東壁は曰く大な石材のためか丁寧に構築されているのに対し、西壁は乱雑な石積み状態を呈している。根石は小口積みが多くみられるようであり、羨門は二ツ塚1号墳と同様に小口積みで占められている。中段から上段にかけても小口積みが主体であり、横口積みされている石材は数個見られるだけであった。広口積みされた側石は存在しておらず、二ツ塚1号墳の石積みとの関係の上では、広口積みの使用箇所は限定されているようである。また根石の下には小礫は挿入されておらず、構築上簡略化されている。が側石間のすき間に人頭大以下の小礫を数多く詰め込んで側壁が構築されていた。このような礫は側壁の保護、形狀の整備等に意識的に挿入されたものと思われる。敷石は大部分が拳大の礫で、意識的に敷きつめた状態ではなく、床面に無雜作に置いて、単に水平を保つ程度に整えているだけであった。したがって石の粗密なところがあり、敷石の確認されなかつた箇所や、数個が重り合っている部分も存在していた。また敷石は遺存している石室内全面に存在し、閉塞石の下にも小範囲であるが敷かれていた。なお、両墳共に石室内側の側壁が面取りされているようであった。

b. 閉 塞

両古墳の閉塞は石室同様に上半部が破壊された状態であったが、残存部分は非常に堅固に構築されており、良好な状態で遺存していた。両古墳共に渢門部分に構築されているが形状はやや異なる。二ツ塚1号墳は石室前庭部側に2個の大形石材を利用し、一方は石材の長軸を石室の長軸方向にして小口を、一方の石は広口を、渢門に面をあわせて設置されていた。さらに双方の石、あるいは石と渢門の間には拳大の石を詰めて、閉塞の一方の壁面を構築している。石室内側には巨大な一枚石を広口を内側に向かって立たせ、側石との間に人頭大から拳大の石をつめて構築している。この間隔をあけた両壁面の間に石材を詰め込んで閉塞の基礎を形成し、さらにその上に石材を積み上げた状態であった。双葉2号墳の閉塞は、石室前方側と内側に大形の石材を石室の長軸方向に、石自体の長軸をあわせて積み上げ、その間に乱雜に石を詰め込んだもので、二ツ塚1号墳と同様である。しかし、二ツ塚1号墳と大きく異なるのは、渢門に面を合わせるように構築されていたのに対して、渢門を覆い隠すように張り出した状態で、閉塞が積み上げられていたことである。このような閉塞が渢門との関係の上で、どのような最終的な状態を呈するか興味深いが、推定は困難である。さらに二ツ塚1号墳のように、渢門のかたむきに閉塞外面の角度を合せるように意識的に形作り、渢門と閉塞を直線的にそろえて構築している状況や、双葉2号墳の渢門から閉塞石が張り出した状態は、前庭部との関係の上で理解する必要があろうと思われる。したがって、両墳の閉塞は渢門、前庭部と共に一体の構築物として考慮する必要があり、前庭部の形態を形作る一要素として、閉塞が意識的に構築されているようである。

c. 前庭部

両古墳共に渢門から前方にかけて前庭部が認められた。平面的には長方形、あるいはラッパ状の形態であり、二ツ塚1号墳に限り、敷石以外の施設が構築されていた。二ツ塚1号墳の前庭部は、石室渢門部から外側へ、直角に渢門面を延長させた形で区画され、それは、閉塞の石室正面を意識した構築と関係しながら直線的なラインを表出している。この区画はさらに石室長軸方向にそって折れ曲り、長方形の区画を呈し、区内には拳大の石が整然と敷かれている。渢門を形成する石材と閉塞は堅固に構築されているが、延長されたライン部分は雑に石積みされている。延長部分は西側より東側の方が長く構築され、50~60cmほどの大きさの石材が根石とされている。この根石はすべて広口積みによって構築されていた。根石上部の石積みは、根石より小形の石をやや後退させながら数段積み上げているが、最終的には裏込め石と区別がつかなくなってしまい、上部構造がどのような形態を呈していたかは不明である。しかし根石の形状、大きさから判断する限りでは、これ以上の石積みは期待できそうにもなく、石室正面は意識しての構築であるが、さほどの頑強さはなさそうである。他にこの前庭部に付属すると思われる特異な石積みが認められた。それは前庭部末端から墳丘傾斜部分に構築されたもので、斜めに階段状の石列が配されており、7~8列を数えることができる。しかし、西部分と

墳丘部分が擾乱され、破壊されてしまっているようであり、全体的な形状は不明である。石列は墳丘中、あるいは地山に掘り込んで埋め込まれた部分もあり、墳丘流出を防止する役目と前庭部、あるいは古墳正面を飾る目的があったのかも知れない。双葉2号墳の前庭部の形状は、確固たる区画は認められず破壊が著しい。さらに敷石も区画、形状等を把握するならばラッパ状に開く形状が、裏込め石との関係の上で推察できるが、決定的な要素を欠いている。このような状態ではあるが、閉塞の構造述べたように、閉塞が張り出す特異な形状であり、本墳も石室正面を意識的に構築していることが認められる。

このように両古墳共に前庭部を有し、石室正面を意識的に構築したことは決定的であり、石室正面の石積みが、前庭部構築に伴なう裏込め石、墳丘の流出防止のためだけの施設としては考えられず、両古墳を特徴づける要素であり、なんらかの目的のために構築されたものであろう。

d. 裏込め石

両古墳共に墳丘と側石の間には、裏込め石が詰められ、石室を保護し、より頑強に構築されていたが、形状はやや異なる。二ツ塚1号墳は非常に数多くの砾が、裏込め石として利用されており、小は拳大以下で、大は大人数でなければ動かすことのできないような石まで、大小さまざまな大きさの石が使用されていた。裏込め石も石室の破壊に伴って上半分が持ち出されたり、破壊時に石室内部に相当量が落ち込んでいた。したがって側壁へどの程度まで詰められていたかは不明である。裏込め石の形状は側壁部と奥壁部では異なっており、側壁部分のものは東側がやや外側に斜めに、西側は逆にやや内側に斜めに詰められていた。石室平面で西側の裏込め石が、比較的少く見えるのはこのためである。奥壁部は側壁部にくらべ粗であり雑であるが、広範囲に詰められ、外斜する度合も強く特異な形状を呈している。全体的に裏込め石は側壁と墳丘を形作りながら、その間に投入したようで、大小さまざまな石を使用している割には乱雑で、ガラガラしており、すきまがあつてスカスカであった。また石室全体を構築する前に、旧地表面に掘り込み、あるいは突き固めてへこましたものか明確ではないが、西側壁と奥壁下に落ち込みが認められた。なお占墳構築前に旧地表面を全体的に突き固めたようである。双葉2号墳の裏込め石は二ツ塚1号墳にくらべ非常に粗であり、破壊も著しく伴なっていた。平面的には西側部分に、東側にくらべ数多く認められるが、東側は巨大な側石が存在しており、このためにさほどの裏込め石は必要としなかったであろうし、さらに閉塞付近は側壁の裏まで擾乱されている。したがって西側の方が多く確認されているのである。また、かなりの量が認められるが、断面では非常に粗であり、数少ない。もちろん後世に破壊されていることは事実であるが、遺存していた墳丘中にも数少いということは、石室の構築と同様に比較的雑に作られた可能性が強い。したがって側壁の補強にはあまり効果が得られなかったと思われる。また、石室全体は旧表土上に構築されており、認められた旧表土は良く突き固められていた。このように両古墳では裏込め石の形状は異なり、差異が認められる。もちろん石室規模も異にするし、形状も違うが、全体的には双葉2号墳の方が、二ツ塚1号墳にくらべ雑に構築されてい

るようである。

2.

以上、双ヶ塚古墳¹⁾、双葉2号墳の構築状態を4つに分けて述べてきた。この両古墳が他の近隣地域の古墳の中に、どのように組み込まれ、年代的にどのような変遷がたどられるのであるか。

さて、一般的に横穴式石室とは、四壁面の一方で外部に通じる出入口があるものを総称し、普通は遺骸を安置する玄室と、玄室に通じる羨道とを備えている。この両者は側壁の一部を抜めて袖部分を構築したり、羨面から柱状の石材を内側に突出させる。等の主に側壁に変化をもたらせる構造のもの、天井部に高低をつけて区別するものや、床に仕切り石を設置して区別したり、般石の有無、あるいは状態に変化をもたらせるもの等の種々の形態があり、普通はこれらがいくつかの組み合せによって区分されている。このような施設や構造上の差異は、区画によって、遺骸を安置するという特別の意味あいをもつ場所としての構造であることは、容易に認めることができる。しかし、今回2次にわたり調査された両墳は、前述してきたように両者の区分は明確でなく、側壁の変化、仕切石の設置等は認められないし、区分の対象となる天井部は破壊されて現存しない。

したがって両墳の石室区画は不明であり、このような意識的な空間差を求めることができない。周辺地域の源流地方では、7世紀代とされる古墳の石室形態が2形態に大別され、帰化人系との関係で理解されている。この2形態は「玄室幅指数50以上の短小な長方形で、一中略一玄門部は左右より狹まり、両袖形の形状を見せるが、これは左右の袖口が突出しての形成であるA形態と、「玄室と羨道との境界が不明瞭な梯形をとる狭長なプラン」というB形態であり、一説してニッ塚1号墳は、ここでいうB形態であることが明確である。だがB形態とされた下伊那郡豊丘村所在の大宮家の上古墳、阿賀市長地コウモリ塚古墳等には、非常に短かい羨道部が作り出され、さらに大宮家の上古墳には仕切石が設置されている。コウモリ塚では羨道部の天井部が玄室部にくらべ、一段低く構築されており、短小で形式的ではあるが石室内の区画が施されている。最近報告された岡谷市カロウトイシ古墳では、羨道部を僅かに内側に突出させて、羨道部²⁾を意識させており、閉塞はこの部分に行なわれていたようである。したがって閉塞時には、羨道部が閉塞石によって隠れてしまうことが考えられ、閉塞を取り除いて初めて羨道部が現われる形態であり、さらに閉塞時の石室形態が、細長い梯形をしていることは注目に値する。

また駿遠地方から南関東の人形河川流域では、河原石を利用した狹長の横穴式石室が分布し、7世紀代の所産とされている。これらの古墳の大部分は天井部を欠き、ラッパ状に開いた前庭部と羨門を有し、羨道部の構築は顕著ではなく、袖無式の石室が主である。

神奈川県厚木市上依知1号墳³⁾では、狹長な石室の前方から昔ほどのところに一枚石の仕切り

石を埋め込んで区画し、同県相模原市谷原2号墳⁶では、羨門から1m前後の床面に仕切石と考えられる一枚石が、石室長軸と直交する状態で埋め込まれている。このように羨道部と考えられる部分は短くそれに比例して玄室部分が長くなる形態を呈している。さらに両古墳共に閉塞時には、仕切り石を利用して閉塞を行なっており、前述したカロウトイシ古墳は仕切り石の設置はないが、無小な羨道部を閉塞石で充満することに何んら変りがなく、同様の状態を呈している。静岡県富士市中里大塚团地1号墳⁷は、愛鷹山麓に立地し、7世紀後半代の所産とされている。石室は袖無式であるが、閉塞前方に石室掘り方から連続する前庭部、あるいは羨道が構築されている。石室中央部に仕切石が設置され、報告者は奥室と前室とに区別している。さらに前、後室共に遺骸安置の室として利用されていたことが指摘されている。したがって、仕切り石によって何んらかの空間的な区分が、石室内に存在していることは事実ではあるが、石室内のすべてが遺骸安置施設であったことから、仕切り石の性格は玄室、羨道の区分を行うものと異り、石室すべてが玄室として利用されていたのであろう。

このように本県を中心とした周辺地域の石室の形状について概略してきたが、翻って本県の古墳はどうであろうか。甲斐国分寺周辺には数多くの後期古墳が群在し、本県古墳数の大半を占めている。その中の一宮町所在の国分塚地1号墳⁸は、7世紀初頭に位置づけられている。石室の形態は細長い梯形の袖無式であり、側壁の変化、仕切り石の設置等はない。外部施設として、石室根石幅を延長した、30~50ほどの礎の広口部を内側に向けた石列が付属している。敷石は石室とこの境まで良好な状態で敷かれ、閉塞はこの境部分に構築されていたようである。したがって、塚地1号墳も石室区画は明確でなく、外部施設という形で略式の羨道が形作られていたようである。他に本地域の古墳群の現状図が、開口されているものに限って、小林広和、里村晃一両氏によって作成されている。公開された古墳は6世紀後半から7世紀前半にかけての構築とされているが、すべて袖部を構築して羨道部の区分がなされていた。また両氏は甲府盆地北縁部の、古墳の現状図を公開し、積石塚との関係を指摘している⁹。その中の古墳にも明確な袖部分を有する古墳¹⁰が存在している。甲府盆地北縁部、国分寺周辺の古墳群には、袖部分の明確な古墳と、不明瞭な古墳が重複する時期の所産として存在しており、同地域、同時期で石室形態の異なる古墳が存在しているようである。

今まで、甲府盆地周辺地域の、6世紀末~7世紀代に位置づけられている古墳の一部を、石室の玄室と羨道という区分を、空間、施設面から概観してきたが、ニッ塚1号墳、双葉2号墳のように、羨道部分を区画する意図の明確でない石室は存在せず、やはり何らかの形で区画されていた。だが、羨道部が短小化、簡略化されているものが多くみうけられ、閉塞を行なった状態では、石室内に空間的な区分を明確な形で示さないものがあることも判明した。これは本地域過渡では、羨道部が意識の上で、無用の構築物として位置づけられ、より形式的な羨道部が多出している時期であることが指摘できよう。しかし、このような形態がいつの時期から起ったのかは不明であり、さらにこのような形態の古墳のある時期に、羨門部をもつ石室が存

在することも事実である。さらに甲府盆地北縁には積石塚も存在しており、三者三様の形態を呈している。したがって、三様の古墳差がどのような関係の上で、墓としての古墳を構成しているかは現時点では不明な点が多く明確でない。さらに、狭長な玄室と形式化・簡略化した羨道によって構成される古墳の中で、両者が明確に区分できないというニッ塚1号、双葉2号墳のような極端な例は存在しなかった。このような形態の石室は類例が少く²²、石室内の空間的な区画を取り除いた古墳として、本地域の特色のある石室形態として把握できるであろう。

3.

石室の形状の他に特色のある形態として前庭部が上げられる。前述したように石室正面が意識的に構築されており、羨門から左右に直線的なラインを、閉塞と共に形作り、立体的な石積みで構築されている。このような石室正面をもつ古墳は数少く、管見に上がった報告例は長野県岡谷市カロウトイシ古墳²³が唯一のものであり²⁴、双葉2号墳も石室正面を形成することは変わりないが²⁵、形態的にやや異っている。したがって、この施設に対する多言することはできないが、前庭全体の関係の上で考えてみたい。

前庭部は墓前祭等の祭祀のために、従来の横穴式石室に取り入れられ、その後道部を延長した形態から、台形、長方形、ラッパ状等の左右に開く形態のものがある。主に羨門からラッパ状に開く形態のものは、南関東の大形河川流域に分布する古墳に、多くみられる形態である。がこの形態のものは、ニッ塚1号墳等の石室正面を構築することができない形態のものであり性格を異なる。したがって、類例は前庭が羨門から左右に開き、台形、長方形を呈する形を持つ横穴式石室に求める必要があろう。山梨県周辺地域でこのような前庭をもつ古墳の点在する地域に、深訪地方と、群馬県がある。群馬県内の前庭を持つ横穴式古墳を概説し、平面形から5型式に分類した論考²⁶があるが、石室正面の構造については論述されておらず不明である。しかし、これらの古墳の前庭は石を利用して、区画がなされていることは注意される。その区画の石室正面部分が石積みされていれば、形態的には類似するのである。さらにこれらの古墳の半数以上が、羨門を加工石材で構築しており、閉塞も加工石材を積み上げている例（金井古墳²⁷）もある。この金井古墳の場合は前庭部の左壁部と石室内、羨門部分のみの調査であり、全体は知ることができないが、羨門と閉塞用の加工石材は面をあわせて積み上げていたようである。左羨門門石の延長部分には、前庭の左壁区画石積みが認められるが、その中央部である羨門から開いた部分には、根石があるだけのようであり、その上部構造は不明である。しかし前庭を区画する左壁には、石が数段積まれ、羨門との間に根石より高く積まれているようであり²⁸、この根石上にも石積みが行なわれていた可能性が強いと思われる。さらに羨門、閉塞石等に加工石材を用いて、羨門から左右に開くラインの中では、意識的に構築されているのである。²⁹しかし、このような前庭に伴なうと思われる石室正面は、ニッ塚1号墳のような前庭区画、敷石等の存在する古墳に、あてはめることは可能であるが、カロウトイシ古墳にみら

れる石室正面の石積みのみで、他の前庭施設に付属する区画石、敷石等がなく、石室正面の直線的ラインだけで前庭を表現している例は、群馬県の古墳の中では管見にふれたものはない。

このようにして見てくると、周辺地域で二ッ塚1号墳に類似した前庭をもつ古墳は、群馬県内に存在が推定できるのみであり、このような前庭をもつ古墳は群馬県と古墳との関係の上で、把握する必要がありそうである。群馬県の前庭をもつ古墳は西毛地方に位置するものが27例、東毛地方が8例と比較的、南信、甲斐地方に近い地方に、分布することが指摘され、墳丘の形状は円墳が圧倒的で、石室はすべて両袖式で、玄門をもつものが多いことが特長²⁰とされている。西毛地方からは、碓氷峠から佐久盆地に入り、和田峠を越えて諏訪地方に入るルートと、十石峠から南佐久地方に入り、八ヶ岳を迂回しながら野辺山、清里を通り甲府盆地に至るルートが考えられ、前庭部を構築するという意識は、このようなルートをたどって本地方に至ったのであろう。そして本地域の地方色の強い古墳構造技術（石室形態）と融合し、二ッ塚1号墳にみられる様相を出現されたと考えられる。さらに狭門、閉塞石以外の石室正面を直線的に石積みする形態（カロウトイシ古墳）に変化したのであろうし、双葉2号墳のような狭門部を覆い隠すような構築があり²¹、いくつかに分化していったようである。また前庭部の施設と思われる石列が、二ッ塚1号墳にはみられたが、類例がなく、ここでは何も触れることができなかった。

さて、両墳の構造年代を石室構造だけをたよりにして、推定するならば、前庭部の構造が問題となってくる。二ッ塚1号墳は岡谷市カロウトイシ古墳の石室正面より、粗雑であり石室の規模は大きい。石材もより大形のものを利用して石室を構築しており、石室が大形から小形へ整備縮小化すると考えられる横穴式古墳の中でも、10m弱と大形の石室に入る。群馬県下の前庭は7世紀中ごろに出現されたと推定²²されており、これよりやや遅れ、カロウトイシ古墳の推定年代の7世紀後葉より、古い時期が推察され、7世紀中葉後半に位置づけられよう。したがって、双葉2号墳は7世紀後葉の構築と思われる。しかし、これはあくまでも石室構造からの推定年代であり、出土遺物等の諸特徴からの年代と相違があると思われる。

このように前庭という意識²³を群馬県下からの影響として、その前提に立って本地域の前庭部形態の出現を考えてみた。が、類例が少ないため、前庭部から起こさねばならなかった。そのため飛躍的で、場当たり的な述懐になってしまったが、諏訪地方から甲府盆地北縁にかけての特徴のある前庭、石室正面であるという指摘だけに留まり、石室内区画の問題と共に、類例の増加を待ちたい。なお、論を進めるにあたって、多くの箇所で誤認、説明不足があると思われるが、大方の御批判と他地域に関する後教示をいただけたら幸いである。最後になってしまったが、本稿を書くにあたって、藤巻正信、志村博、山本茂樹の諸氏より文献の借与を受けた。未筆ではあるが、この紙面をかりて感謝の意を表する次第である。

（伊藤恒彦）

【註】

- (1) 玄室と羨道との区別が明確でない石室形態であり、用語上不適当と思われるが、石室の入り口ということで、この用語を用いた。
- (2) 表現方法は、大塚淑夫（1969）『西駿河地方における横穴式石室墳の構築について—藤枝市八幡2号墳の場合—』考古学ジャーナル29号に従った。
- (3) 桐原 健（1969）『諏訪地方にみられる終末期古墳の様相』『長野県考古学会誌3』
- (4) 宮坂光昭他（1976）『唐櫃石古墳、姥ヶ懐古墳—長野県岡谷市唐櫃石古墳（赤彩横穴式石室墳）及び姥ヶ懐古墳発堀調査報告一』
- (5) 神奈川県教育委員会（1977）『当麻遺跡、上依知遺跡』—一般国道129号線改良工事にともなう調査—』神奈川県埋蔵文化財調査報告12。
- (6) 谷原遺跡調査団（1972）『谷原—神奈川県相模原市谷原遺跡の調査—』
- (7) 富士市教育委員会（1976）『中里大塚团地古墳』
- (8) 山梨県教育委員会、山梨県遺跡調査団（1974）『国分塩地一号墳—宮町群集墳の調査—』
- (9) 小林広和、里村晃一（1975）『甲斐国分寺周辺における後期古墳の様相』古代学研究77、古代学研究会
- (10) 小林広和、里村晃一（1975）『甲斐盆地北縁部における後期古墳の様相』史蹟5、山梨史学研究会
- (11) 本年、二ツ塚1号墳の南方150mほどの所に所在する竜王2号、3号墳を調査したが、同様の形態のものであった。来年度報告予定。
- (12) (4)と同じ
- (13) 未報告のものとして、来年度報告予定の竜王3号墳がある。
- (14) 松本浩一（1976）『群馬県における横穴式石室の前庭について』古代学研究80、古代学研究会
- (15) 尾崎喜佐雄（1966）『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- (16) ⑯の文献の図版82より推定。
- (17) ただ、この石積みが裏込め石の流出を防止する意図で、積み上げたものであったのかも知れず、石室正面を意識して“装飾”あるいは“見せる”状態に正面を形成させたカロウトイシ、竜王3号墳とは、大きな相違があるようである。
- (18) ⑯と同じ
- (19) 竜王2号墳も双葉2号墳に類似する形態を有している。
- (20) ⑯と同じ
- (21) ここで言う前庭とは、本地域に見られた石室正面の石積みをさす。

第2節 出土遺物

各古墳の項で遺物の出土状態及び遺物内容が説明されている様に、その原位置を正確に保つ

ていたものは無いと考えられる。しかるにそれらが今日の破壊によって動かされていると認められるのは二ッ塚1号墳であり、穀床の大部分が剥がされ、馬具、金環、須恵器、土師器等の散乱状態からしても充分に理解しうるところであろう。玉類は閉塞石室側の西隅に一括出土した。もしこれが原位置とするならば、送葬遺体は入口に頭を向け、西側壁と平行に安置されたものと解することができるが、その他の副葬品である鉄鎌や金環等の一般的な遺物が伴出しないところから連珠のままこの位置に置かれたものと推定される。金環の数は5個であることから、単純に追葬回数を考えるなら2回が妥当であろう。又、前庭部より土師器杯、須恵器杯、高杯、提瓶、甕等の一括遺物や破片が多量に出土している。通常こうした遺物は墓前祭と結びつけて語られるべきであろうが、この出土は前庭部に積み上げられた穀群の状態からしても石室内よりのかき出しによることが明白であり、前庭穀床に置かれているものも無かった。以上のことにより、遺物のまとまりをもって埋葬回数及び遺物の時間差を調査することはできなかった。

双葉2号墳は奥壁部から約2mまで削平され、奥壁の板石を除いて側壁も全く取り去られていた。このため、埋葬の中心とも考えられる奥壁部からの遺物は皆無であった。しかしに現存した石室内は遺物のまとまりが正確であって、当初古米の姿をとどめているかに思えた。それは石室中央天井石が二つに割れて落ち込んでおり、その下面と穀床との間はほとんど隙間がないか、最大15~20cmであって、土質もしまった自然埋土と想定されるものであり、保存状態は良好に思えた。しかし実際に遺物の整理をしてみると幾つか疑問の点があり、このことについては遺物の項で説明されている様に、玉類、鉄鎌の一群と直刀、鍔の一群が離れていること、金環の対になるものが石室入口部と中央に1点づつ分かれて存在したこと。又、石室内より明鏡（洪武通宝等）が出土したこと等によっても比較的古い時代に石室内が荒されていることが判明した。しかし、基本的には玉類及び鉄鎌、刀子等が出土した部分に一体が安置されたことは間違ひ無いことであり、金環5個の出土からすれば追葬は2回とも考えられるが、正確には奥壁部の破壊の為に知ることはできない。更にこの双葉2号墳の大きな特徴は須恵器、土師器等の杯類の破片すらないことであり、若干の須恵器甕破片を得たのみである。このことは、二ッ塚1号墳をも含めて当地域古墳の特色とも考えられ、須恵器製作集団から疎遠な集団あるいは、卑斐国造と対峙する集団であったとも考えることができよう。

須恵器、土師器出土遺物のほとんどが二ッ塚1号墳から出土している。これらは二ッ塚1号墳及びかつて存在したふたん塚等を盟主墳とする赤坂台古墳群の二ッ塚支群の築造年代を決定する重要な決定要素となるはずである。須恵器の出土品には裏片が最も多く、須恵器全体の80%を占める。このうち胎土だけをとってみれば、軟質の胎土で洗浄中にも溶解する様なもの、硬質で薄手の胎土で、内面の叩目をほとんど察消している明灰色のもの。暗灰色を呈し、断面中央部が赤褐色になっており、焼成時の火ぶくれによって器面が剥落したりしているものも多い。外表面は板目、内面は同心円状の叩目が見られるが極めて粗悪品であり遠方よりの移入品とは

考えられない要素がある。本県での須恵器生産窯はあまり知られておらず、唯東八代郡境川村牛居沢に須恵器窯跡が存在したことが山本寿々雄氏によって報ぜられ、窯跡の製造年代を6～7世紀に置いている。この窯跡の製品の特徴は素地胎中に砂粒が多く含まれ、しかも褐色スコリアが混入している点とされる。本墳発見の粗製鏡等がこの窯に於て製造されていることも考えられるが、若干胎土が異なる様である。

高杯は4点出土しており、杯部と脚部の揃ったものは無く、杯1、脚3個である。杯は有蓋杯身であり、受部が水平に外方へのびるもので陶邑T K 209号窯に比定され、脚部は太く大きく開く良質胎土のものと、暗灰色で砂粒を多く含む細い脚の2個があって、いずれも二段透をもち、209号窯は7世紀前半～中葉に置かれるもので、これらが古墳築造の年代を表すものと解して良いであろう。

提瓶は3個あって、復元されたものはボタン状の小突起を両肩に付けられるもので、突起の特徴からいうならば提瓶のうちで後出的なものと解されよう。他の2個は胴一部分しか復元されなかつたが、恐らく提瓶と考えて良いもので、胴が球状に近い形をもつ。口縁及び把手の形状が不明のため、年代の決定をすることはできないが、明灰色で良質の胎土から、前述完成品に先行するものと想される。

有蓋高杯で二段透のものは春日町孤塚古墳よりほぼ同期の遺物がある他は県下での数は少ない。又、提瓶は御坂町金川原字葉舞場69番地所在古墳出土（7C中）→同720番地葉舞場古墳→（7C後半）→二ツ塚、寺の前、甲西町住村塚（7C末）等に編年順序が想定される。葉舞場69番地古墳の提瓶は、口縁を欠損しているが両肩に環状把手があり、直交する前後にボタン状貼付が施されるもので、胴部は片面が膨み、一方は偏平である。この提瓶は7世紀前半に比定されるものであるが、伴出した杯からすれば7世紀中葉頃に置かれるであろう。

土師器については7C後半に位置するもので、ほぼ大過ないものと思われる。土師器の杯はこの他に平安期に比定されるものが含まれ、器内薄く胎土密で粒子こまかく器外面及び底部にヘラ削りが施される平安後期になるもので、この時代にも追葬、あるいは盜掘を受けたと考えられる。平安期の遺物が含まれているのは、本県下各地の後期古墳からも見られるところであり、逆に平安時代の風俗を考える上で貴重でもある。

馬具については2つの古墳から発見されているが、二ツ塚1号墳出土遺物は儀礼用装飾の施された馬具一式が埋納されていたと思われる。轡は両墳とも1個づつあり、二ツ塚1号墳の方が大型で、双葉2号墳は小形である。いずれも鉄製環状鏡板をもち、立間部の鉄具が板状で舌が取り付けられている。東山梨郡春日居町の天神のこし古墳出土の轡も同様の形態で、報告者の坂本美夫氏は7世紀末に比定しているので、両墳出土品も同期にかかるものと推定される。唯、双葉2号墳の轡には引手がなく、その残欠も石室内から発見されていないのが特異である。

轡は春日居町寺の前古墳から3個出土しており、鉄地金張りの銀杏形鏡板をもつ逸品1個の他に鉄製環状鏡板の2個がある。この逸品が寺の前古墳の轡中最も古く考えられ7世紀中葉頃

に比定され、その後に数回の追葬があったことが遺物からも考えられる。更に春日居町孤塚古墳より2個出土しており、1つは引手が千段巻状になり立間部に舌の付けられるもので、坂本氏により8世紀初頭の年代を考えられている。しかし同墳より二段透しをもつ有蓋高杯が出土しており、形状からして陶邑編年II期末TK209号窯期あたりにその年代を考えられることから、前述櫛は当初の副葬品ではなく、追葬品と思われるものである。この他に山梨市上栗原無名塚からは、無舌立間部をもつ櫛が2個あり、三塚町大塚小学校内三珠考古館にも附近の古墳出土のものがある。櫛で立間部に舌をもつものは宮坂光昭氏によれば諏訪郡では8世紀に置かれると言われるが、本県の同類櫛はそれよりもやや古く考えて良いものであろう。

馬具の飾金具が二ツ塚1号墳では数多く出土し、中でも特筆すべきは鞍の縁に付けた細長い鉄地金張りの飾金具であって、他の辻金具や飾金具は前記寺の前古墳から秀品が出土しており雲珠、辻金具等が見え、金張り鉄板透し彫の銀杏形鏡板をもつ櫛に伴うものであろう。二ツ塚1号墳では雲珠は無いものの他は揃っており、当地の馬具研究の好資料を得た。

この他に特殊なものとして銅製金貼の飾鉢及び象鼻形の中空銅製品がある。後者の表面には華と鳳凰を鋲出し、両者を結びつけるように唐草文が陰刻され、文様には金貼されていた。この用途については不明であり、この時代に伴うものか類例をまたねばならぬ。又鐵形銅製品は福岡県の2古墳より出土する例があり、馬具の飾金具と考えられる。

武器類は直刀、刀子、鉄鎌等があり、量的には二ツ塚1号墳の方が多いが、保存状態は双葉2号墳の方が優っている。鉄鎌中平根鎌と尖根鎌の出土について若干の問題が見られる。即ち二ツ塚1号墳からは尖端可能であった17本のうち4本が平根、他は尖根鎌で、双葉2号墳は尖根鎌のみである。こうした差は、実用に適していない平根鎌を考えると、祭祀的な意味が強く双葉2号墳の埋葬者は武人的色彩の強いことが観察されるであろう。

直刀は両墳から出土しているが、二ツ塚1号墳のものは欠損品で、平造り平棟有段両面型式で7世紀末～8世紀の製品と推定され、県下でも類例が少ない。両面大刀は寺の前、無名古墳(竜王町)や天神のこじ古墳の他に県下各地から出土しているが、一般的には片側→両面へと変化することが知られている。

以上の遺物の年代等から古墳の年代を考えると双葉2号墳は7世紀末、二ツ塚1号墳は7世紀前半～中葉にその築造年代が考えられ、追葬は7世紀末～8世紀期、あるいは平安後期にも行なわれたことが考えらるれであろう。

(末木 健)

【註】

参考引用文献は坂本(柴島)美夫氏の一連の研究である甲斐考古の古墳出土遺物集成によった。須恵器については「陶邑I 平安考古学クラブ-19」「陶邑I 大阪府文化財調査報告書28」及び山本邦々雄氏の「山梨県の考古学」を利用した。

なおこの遺物の考察については明治大学小林三郎助教授をはじめ同大学大学院生の方々の御意見を

拝聴し、筆者の解釈で記した為に厚意ある助言が正確に生かされていないかも知れない。これは筆者の責に帰すところである。

終 章

本県の後期古墳の調査は昭和43年、八代町教育委員会による八代町船橋塚1号墳、昭和49年一宮町国分集地1号墳（山梨県教育委員会）、昭和49年大月市子の神古墳（大月市教育委員会）、昭和50年春日居町天神のこし古墳（春日居町教育委員会）等だけであって、石室構造と遺物の両者を得て古代の甲斐國文化を語ることができなかった。本報告書の赤坂台古墳群で、中央道にかかるものは、不明なものを含めて8基であり、昭和51年度には3基、昭和52年度には4基、53年度に1基が計画され実施されてきた。今回は51年度調査分であって盟主墳とされる二ツ塚1号墳と、支群を別にする双葉2号墳、不明確な宇津谷無名墳の調査の報告である。この報告によって甲府市西部の後期古墳の実態の一部が明らかにされたが、群としての古墳を考える場合53年度分の報告書まで持っていたかなければならないだろう。

石室構造での特色は無袖台形状長方形石室と前庭部をあげることができ、伊藤恒彦の考察によれば群馬県からの影響と考えられ、諏訪地方に近親性を求められるという。無袖型石室は県下一円に認められ、大月市内では胴張りの強い石室で武藏国の影響が見られ、東八代郡下では相模国あたりと強い関係がありそうである。こうしてみると北口摩郡下が信濃あるいは群馬県下の流れとすれば、甲斐國の古墳時代後期文化は三方からの流入によって構成されていることになる。

このことを遺物の上で見ることはできないが、年代的には遺物中須恵器の編年観に求めれば7世紀前半～中葉に置かれ、石室だけの年代7世紀末～8世紀初頭の年代とは半世紀の差が認められる。この差について現在のところ遺物に重点を置いて考えなければならないだろう。ある意味ではこうした石室構造と前庭部をもつ後期古墳を本県独自、特に北巨摩地方を中心として考えることは出来ないだろうか。そうすれば石室と遺物の年代差は一致して考えて良いものとなるであろう。

今後、古墳の石室構造そのものの年代決定は困難であり、調査の重要性を更に痛感する様になった。又、古墳文化終末の積石塚や、逆に6世紀から現われる大形横穴石室墳との関係も今後の課題として残されている。

遺物では須恵器の量が少ないことが目立っている。本古墳群の特色であろうが、近在の爱好者が多量の須恵器を所有しているという話も調査中に耳にしたが、それらを実見し、話を直接聞くことができなかった。もしそれが本当で、赤坂台古墳群出土の須恵器だとすれば更に年代を明確にすることができるはずである。この調査は次年度に行う予定である。

以上、この古墳群にまつわる問題について若干の見解を述べたが、大方の研究には不充分で

あることをお伝えしたい。

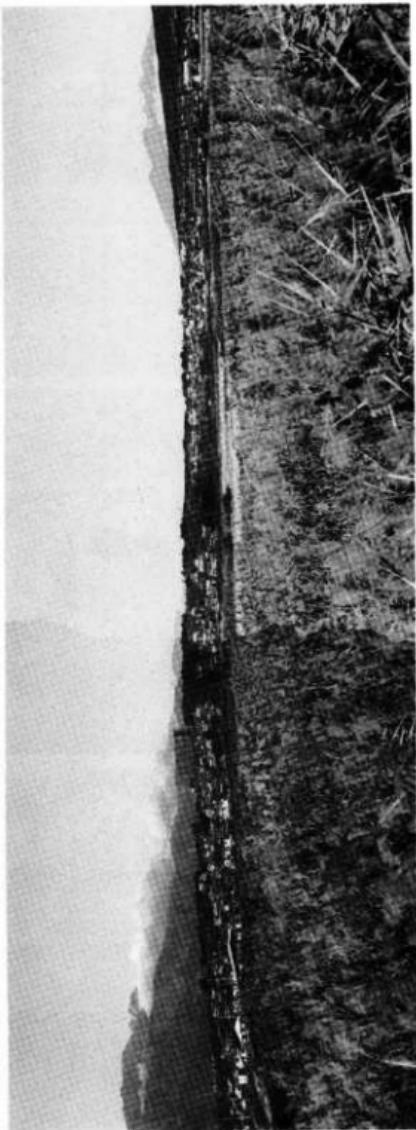
調査に参加していただいた調査員、補助員、地元作業員の方々を始め、地元教育委員会、道
路公団の方々の協力に対し深く感謝申し上げます。また報告書作成にあたって明治大学小林三
郎助教授、同大学大学院生各氏、坂本美夫氏に助言と協力をいただいた。記して謝意を表しま
す。。

(末木 健)



赤坂台

赤板岩



圖版 3 二ツ塚一号墳発掘調査風景

鉢入式



石室内作業風景



実測風景





(1) 発掘調査前墳丘全景



(2) 発掘調査終了墳丘全景



(1) 石室 (南側より)



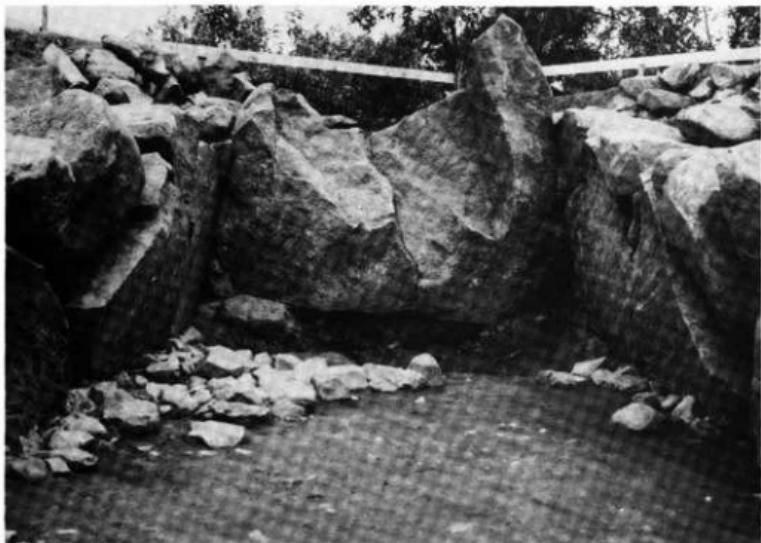
(2) 石室 (北側より)



(1) 西側壁石積（北側から）



(2) 東側壁石積（北側より）



(1) 奥壁



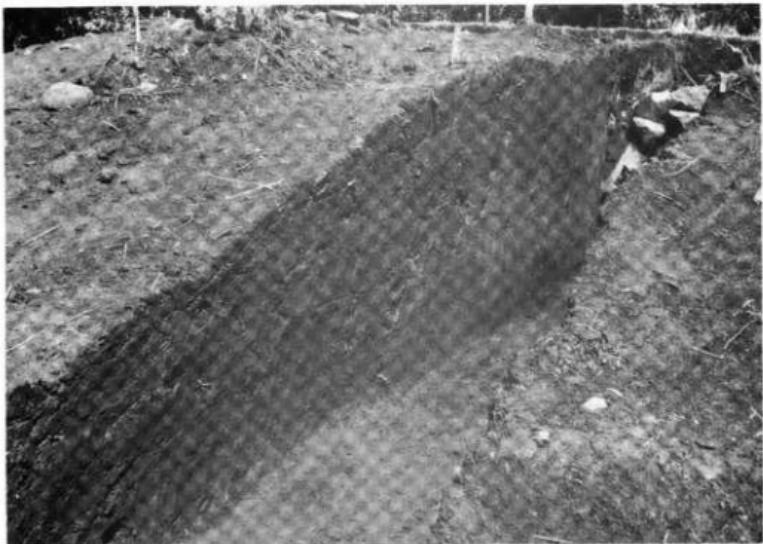
(2) 閉塞石室側



(1) 石室全景
(中央の溝は試掘溝)



2) 閉塞石前面及び
前庭部敷石



(1) 西側セクション



(2) 北側セクション



[2]石室前面石列

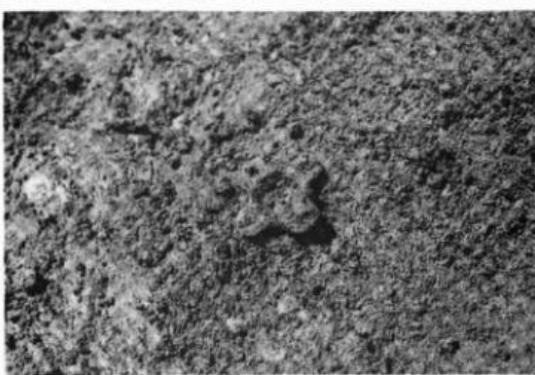


圖版 11 遺物出土狀態

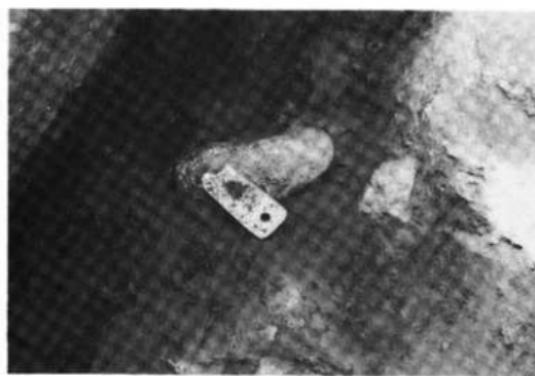
石室內埋土和鐵出土



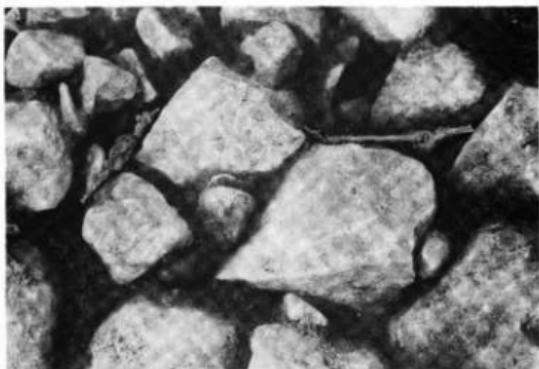
石室內埋土和金具出土



石室床面有孔磁石出土



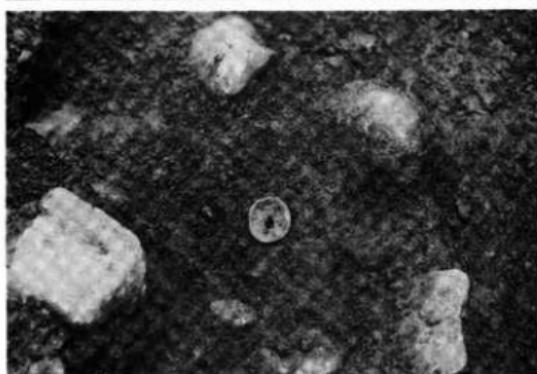
圖版 12 遺物出土狀態



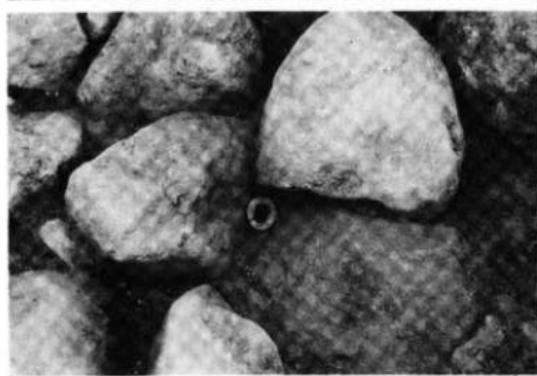
石室內床面鑄出土

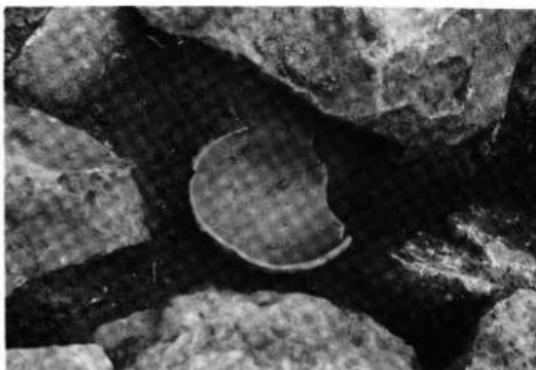


石室內床面飾金具出土



石室內床面金環出土







須恵器杯蓋



土師器杯



須恵器高杯脚



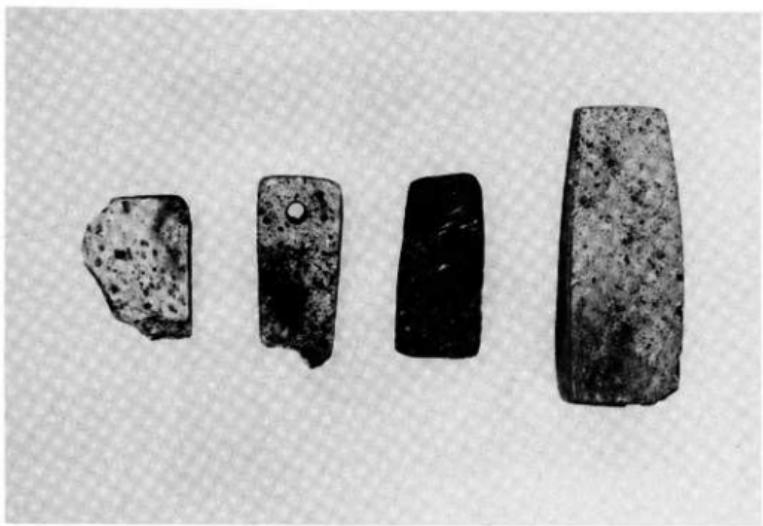
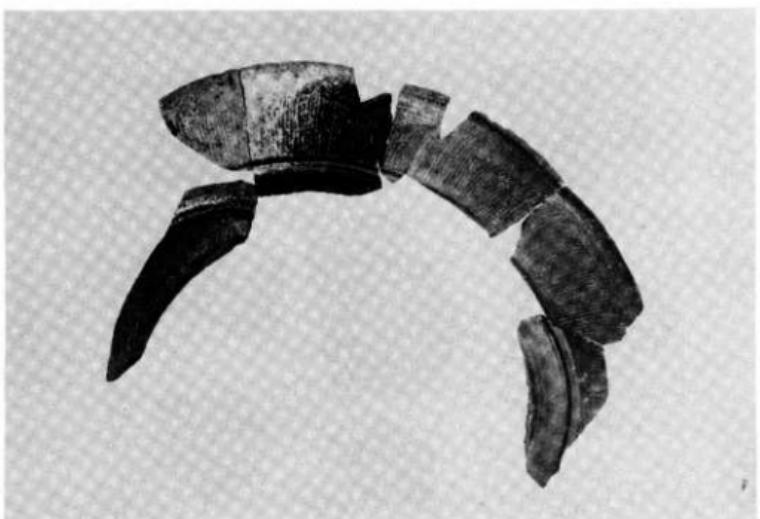
須恵器高杯脚



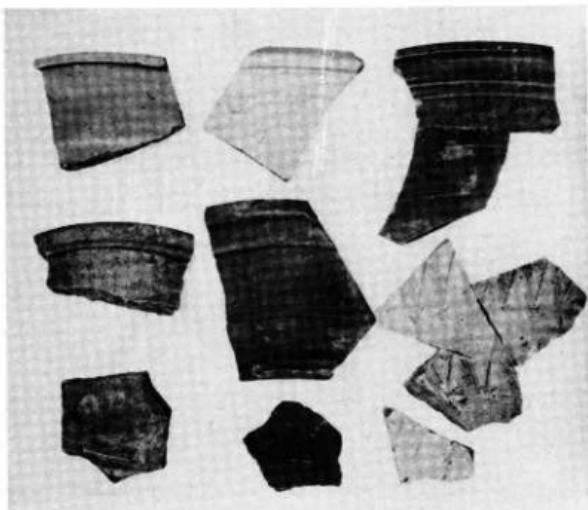
提瓶



須恵器平瓶口緣



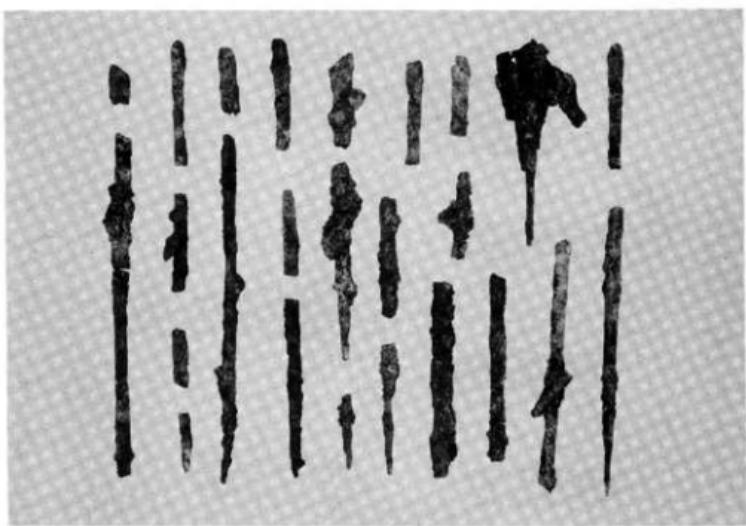
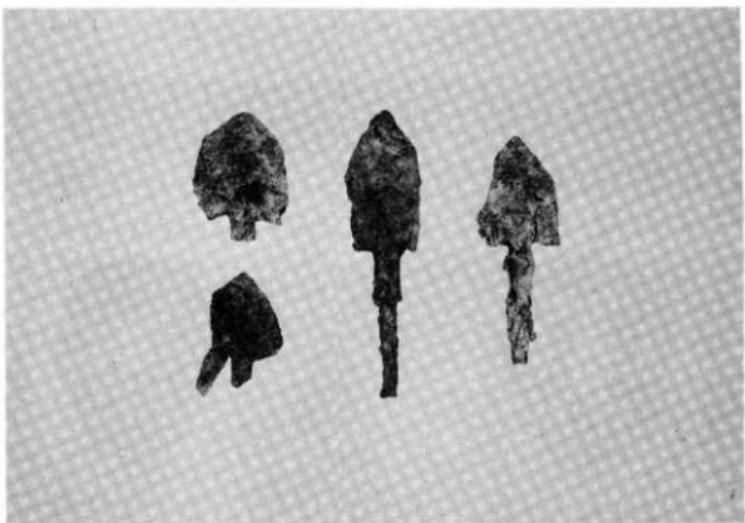
砥 石

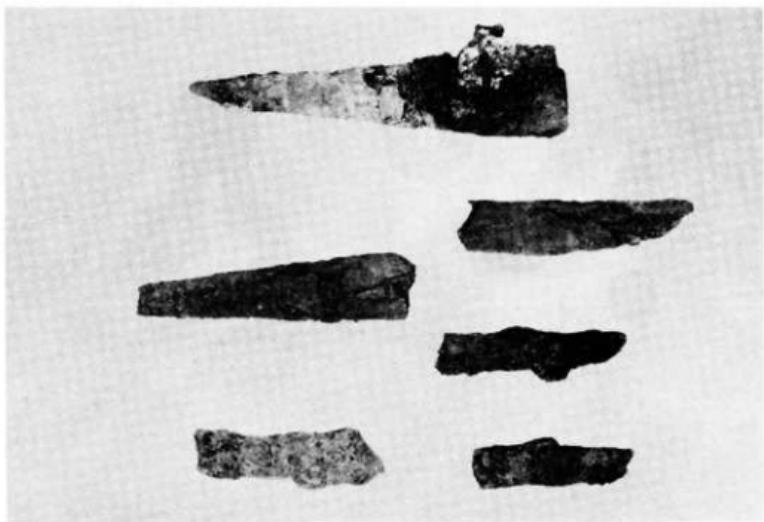
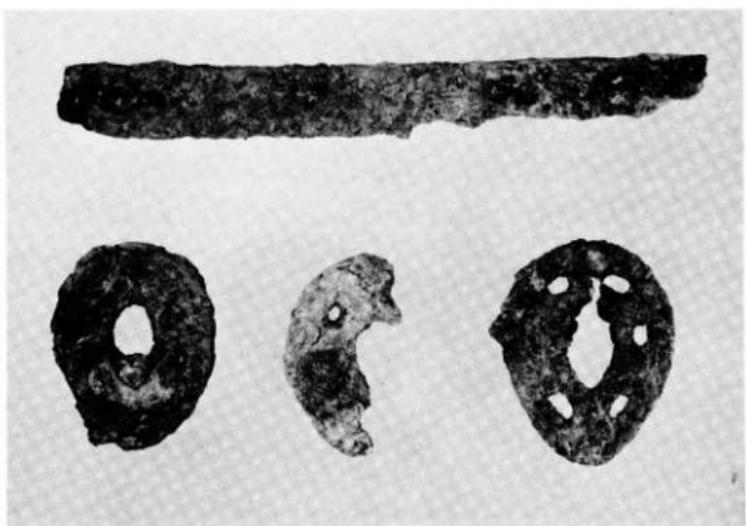


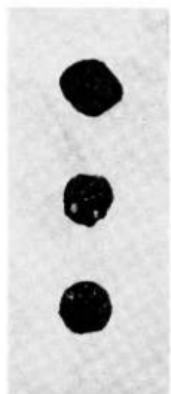
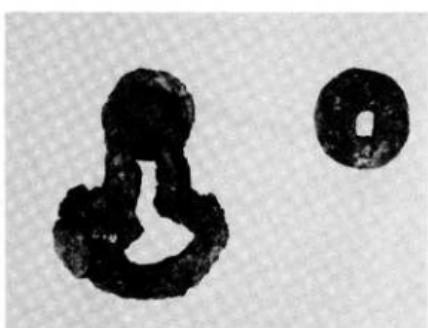
須恵器 瓦破片

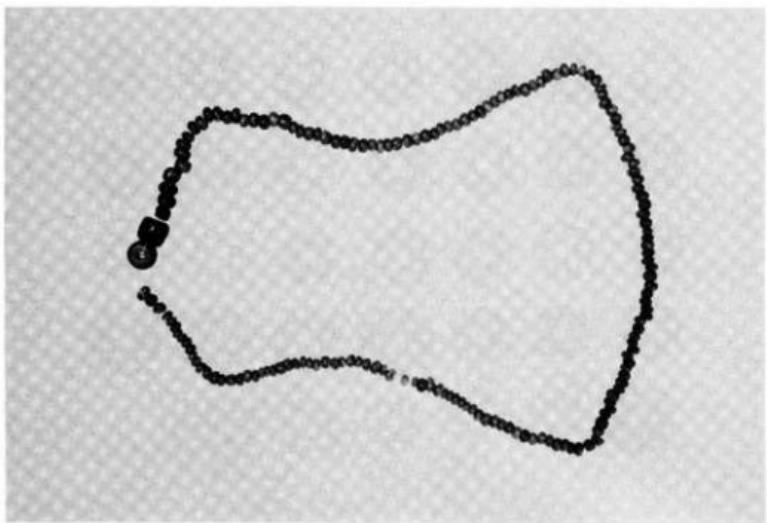
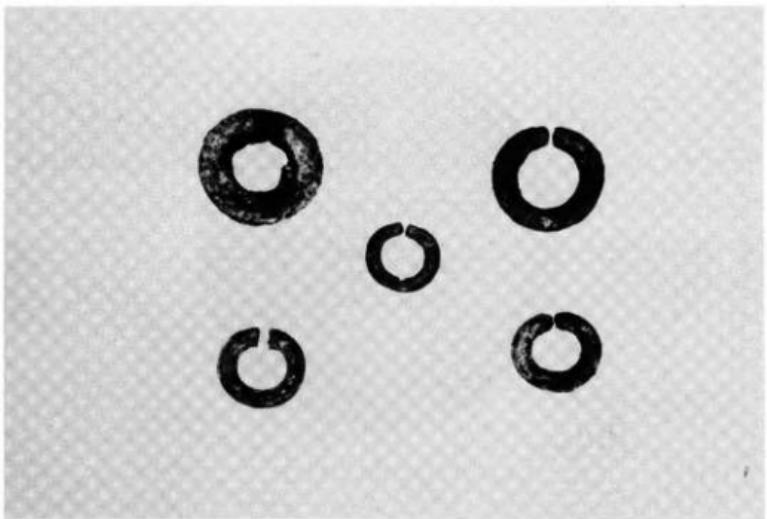


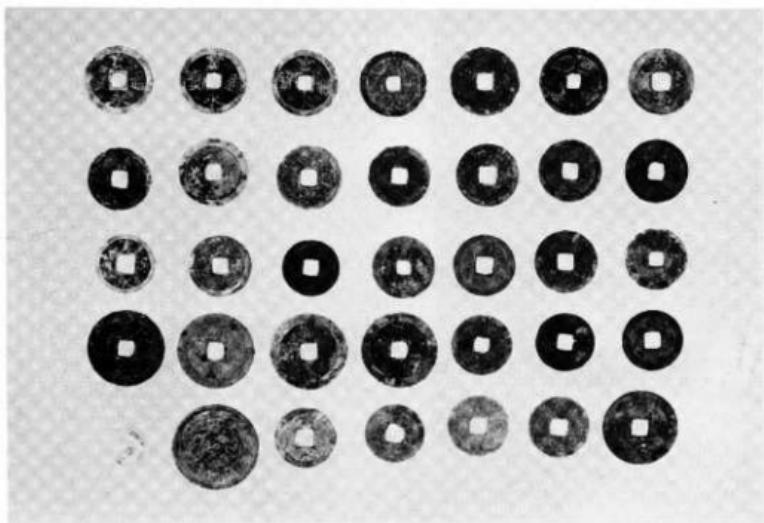
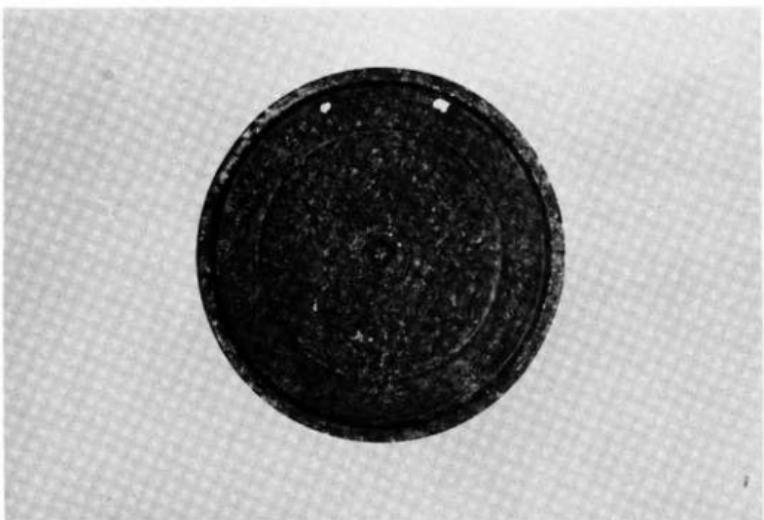
須恵器 瓦破片

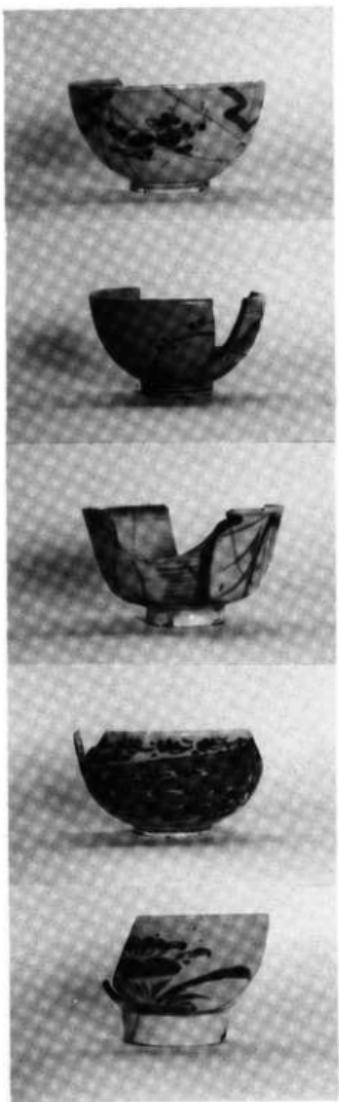


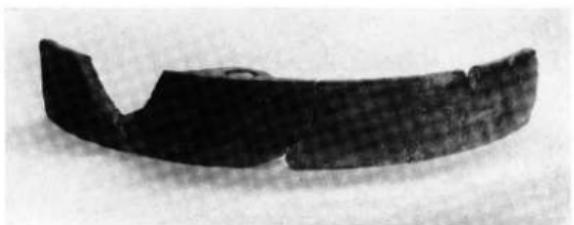












立木雜草除去風景



兒掘風景



実測風景





(1) 調査前の古墳



(2) 盛土除去後の石室



(1) 東側裏込石の状態



(2) 西側裏込石の状態



(1) 東側壁石積状態（中央の平石は天井石が欠損したもの）



(2) 西側壁石積状態



(1) 閉塞石正面



(2) 閉塞石内側石積



(1) 西側壁裏込断面



(2) 東側壁裏込断面



(1)
奥壁根込石



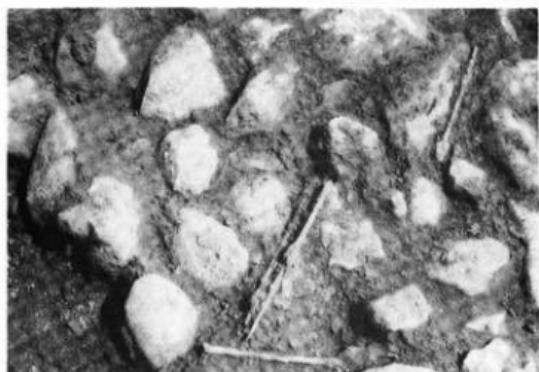
(2)
石室北側より



(1) 切子玉

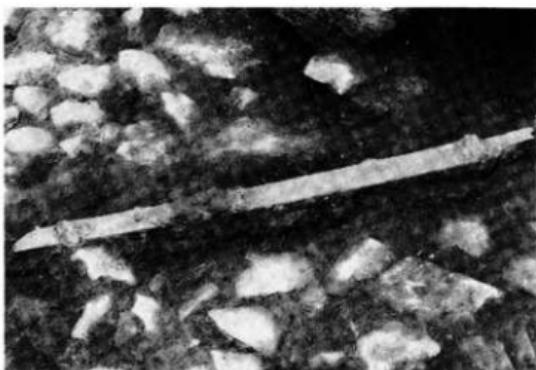


(2) 刀子

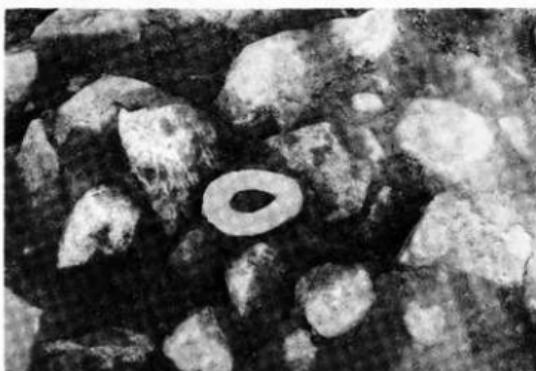


(3) 鉄錐

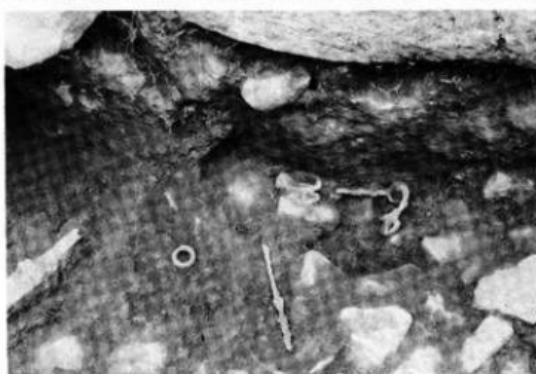
(1) 直刀

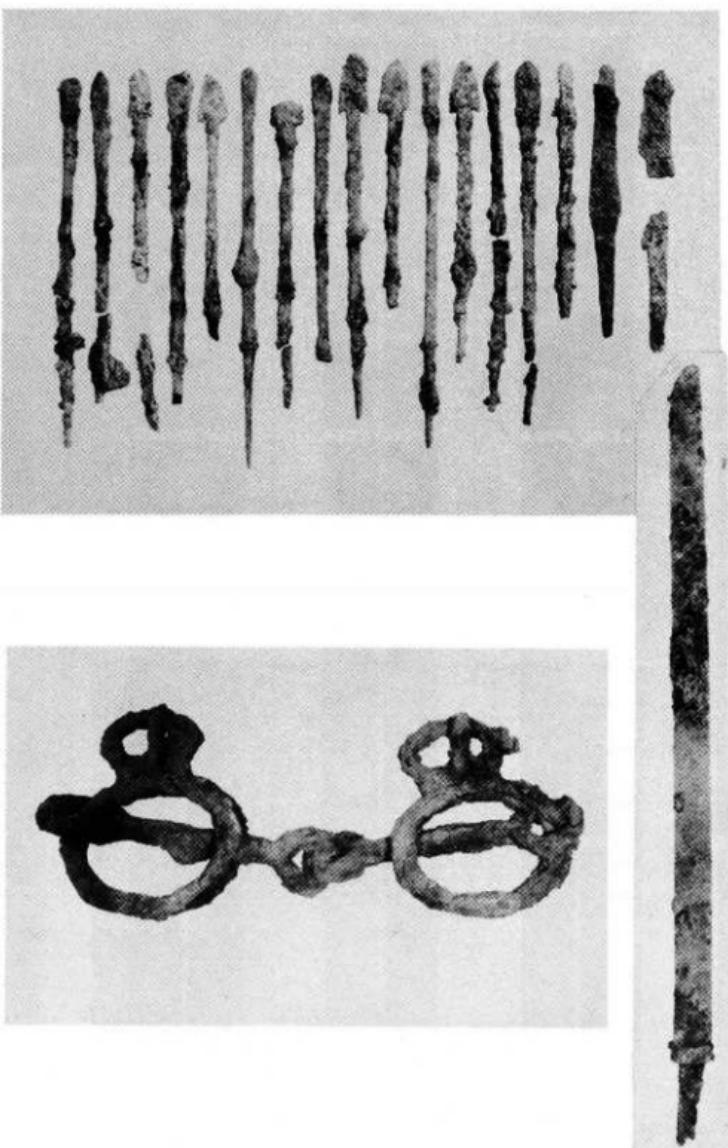


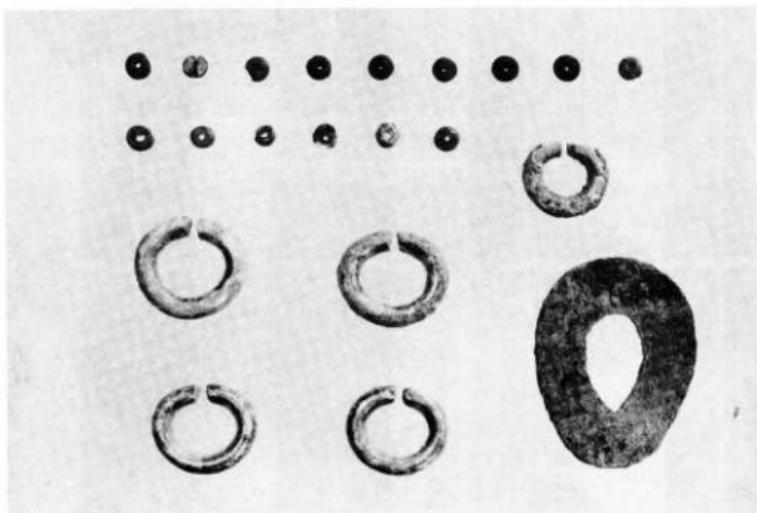
(2) ツバ



(3) クツワ



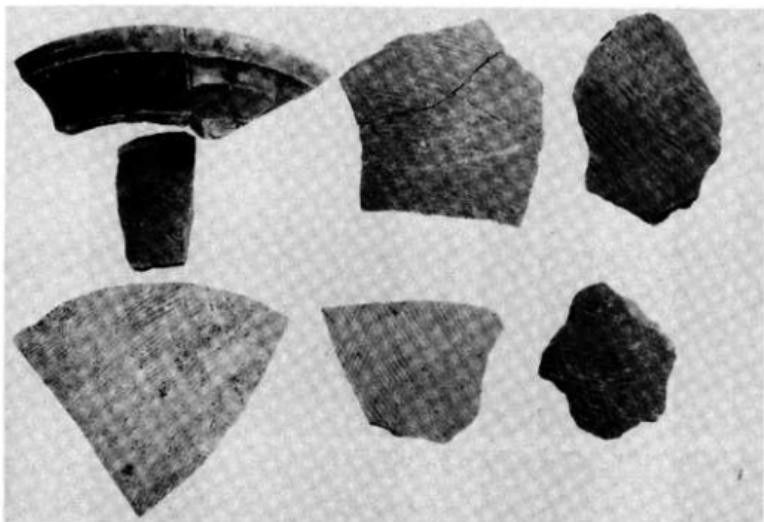




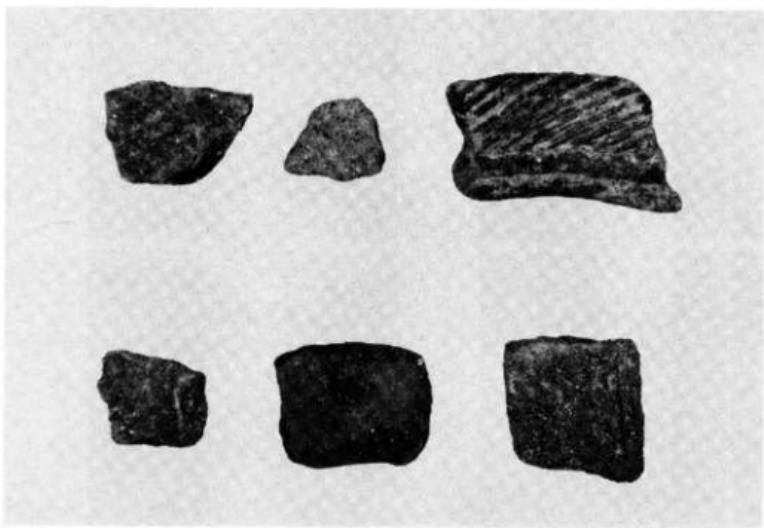
上段、土製練玉 下段 ガラス玉



水晶製切子玉、算盤玉



須 恵 器



繩 文 式 土 器



(1) 調査前



(2) 作業風景



昭和53年 3月25日 印刷
昭和53年 3月31日 発行

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

— 北巨摩郡双葉町地内 1 —

発行所 山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局
印刷所 勝美堂印刷所

